

目 次

1. 各専攻・講座の教育・活動報告

看護学専攻・看護学専攻・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1

医療技術学専攻 医用量子科学講座・放射線技術科学専攻・・・・・・ 8

医療技術学専攻 病態解析学講座・検査技術科学専攻・・・・・・ 18

リハビリテーション療法学専攻 理学療法学講座・理学療法学専攻・・・・ 30

リハビリテーション療法学専攻 作業療法学講座・作業療法学専攻・・・・ 36

2. 公開講座・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 44

看護学専攻・看護学専攻（平成 31 年度及び令和元年度）

2019 年度は、4 月 30 日に平成が終わり、5 月 1 日より令和となった。顧みれば、昭和 64 年から平成になった時期、医療技術短期大学部から 4 年制化に向けて機運が高まり、平成 10 年に医学部保健学科、平成 14 年に大学院医学系研究科博士前期課程、平成 16 年に同博士後期課程が設置された。以来、国立大学法人に開設された医学系研究科看護学専攻として、「知」の創出と人材育成における社会的役割とともに、わが国はもとより世界をリードできる専門職、研究教育職の育成が求められている中で、当専攻は平成の時代とともに、看護学の発展に寄与する教育・研究活動を目指して、教員の多くが文科省科学研究費を獲得し、重要な研究課題に取り組んできた。成果は、国内外の学会等での発表の他、トップジャーナルの論文への掲載に向けて投稿、掲載されている。次年度は改組により 1 専攻化「総合保健学専攻」となり、「看護学専攻」と表するのは今年度までとなる。

若手研究者の育成においては、後述のリーディング大学院プログラムの推進、韓国の延世大学との学術交流、また、学部学生の国際的視野を広めるために韓国・延世大学、中国・上海交通大学、シンガポール・シンガポール国立大学への学生の派遣と受け入れのための短期交換留学制度の維持、充実に努めている。

学内の運営としては、博士後期課程学生の学位授与率の向上を目指して、学位審査の手順や準備等について広く情報を共有し、教員の意識改革にも取り組んでいる。大学院生の獲得のためには、大幸キャンパスで行ってきた大学院説明会に加えて、本学医学部附属病院看護部・看護キャリア支援室と協働で行う附属病院職員対象の大学院説明会も行い、臨床と教育・研究の場である大学とをつなぐために活動している。学部在校生に対しては、卒業後、臨床に就職する進路のみでなく、大学院進学も検討し、若いときに研究力を身につけてキャリアを形成していく道筋も伝授している。また、助産師養成教育の学部から大学院への移行決定に伴い、より高度な専門性を発揮できる助産師養成をめざすための教育について準備を進めた。そして、数年来、議論を重ねてきた大学院の組織改革について着地点を見出し、今年度、具体的な組織の構成を検討した。

1. 運営

1) 組織構成

平成 24 年 4 月の大学院講座化以降、基本的な組織は 2 講座制（基礎・臨床看護学講座、健康発達看護学講座）で、大学院教育等の運営にあたってきた。次年度、大学院改組となり、過渡期である今年度に限り、情報分野の准教授 1 名が本専攻に加わった。兼務の学部教育は、4 領域体制で対応し、基礎看護学 8 名、臨床看護学 8 名、発達看護学 8 名、地域・在宅・老年看護学 8 名の計 33 名（うち年度途中退職 2 名・年度途中入職者 1 名）教員構

成で教育研究活動に当たった。

2) 運営状況

看護学専攻では、看護学専攻教授会または看護学専攻拡大（教授・准教授・講師含む）教授会（毎月1回、必要に応じて臨時開催）、全教員による看護学専攻会議（毎月1回）を定例開催し、専攻の運営方針、委員会活動、日常の諸問題等に対応した。また、大学院委員会（毎月1回）を始め、各委員会の活動を通して、専攻内の教育研究活動のより円滑な運営と課題の抽出に取り組んだ。

3) 医学部附属病院との連携

医学部附属病院看護部、看護学専攻、看護キャリア支援室の協力体制によりユニフィケーション委員会を定例開催し（隔月1回）、看護教育の協働に関する各役割と連携を調整した。また、年に2回開催する看護専門委員会では看護部（看護部長、看護副部長、看護師長等）、看護キャリア支援室、看護学専攻全教員が一堂に会して、実習等の現状と課題を共有し、実習指導能力の向上にも努めた。

2. 教育活動

1) 学生について

学部：平成31年4月には、新入生82名（女子73名、男子9名）が入学した。また、令和2年3月には、看護学専攻83名（女子75名、男子8名）が卒業した。

大学院：平成31年4月には、博士前期課程15名（基礎・臨床看護学分野6名、健康発達看護学分野9名）、博士後期課程8名（基礎・臨床看護学分野5名、健康発達看護学分野3名）が入学した。また、令和2年3月には、博士前期課程17名（基礎・臨床看護学分野7名、健康発達看護学分野10名）、博士後期課程2名（基礎・臨床看護学分野1名、健康発達看護学分野1名）が修了（満期退学後の学位取得を含む）した。なお、令和元年9月、博士前期課程1名（基礎・臨床看護学分野1名）、博士後期課程2名（基礎・臨床看護学分野2名）が修了している。

2) ガイダンス

平成31年4月3～9日に学部新入生（1年生）、新2～4年生、大学院新入生（前期・後期課程）に対して専攻共通・専攻別ガイダンスを行った。学習（修）計画、学生生活、感染対策、図書、情報、ハラスメント関係等、一部に倫理審査、国試・就職等に関するガイダンスを行った。

3) カリキュラム・資格等

学部：3年次の4月に保健師・助産師各選抜試験を行い、保健師選抜は15名、助産師選抜は8名が合格し教育の充実に努めた。令和2年2月に保健師15名、助産師8名が、また看護師は83名が国家試験を受験し、保健師100%・助産師100%・看護師97.6(81/83)%の合格率であった。

大学院：看護学専攻博士課程（前期課程）のがん看護専門看護師（OCNS）コースは、38単位カリキュラムに移行して教育のさらなる充実に図り、平成31年度4月入学者は2名、令和2年3月の修了者は1名であった。小児看護CNSコース26単位カリキュラムにおける令和2年3月修了生は1名であり、今年度をもって終了とした。認定期間（10年間）におけるコース履修生は11名、令和2年3月現在における小児看護CNS取得者は7名となっている。

リーディング大学院“ウェルビーイング in アジア実現のための女性リーダー育成プログラム”は7年目となり、5年1貫プログラム修了生の輩出は2年目となる。令和2年3月時点における看護学専攻の履修生は、博士後期課程3年次（第2期生）2名、同1年次（第4期生）1名、博士前期課程2年次（出産により休学した第3期生1名および第5期生1名）2名、同1年次（第6期生）1名であった。令和2年度は、博士後期課程3年次（第1期生および第2期生）の2名が博士（看護学）の学位授与に至り、学位記と共にプログラムの修了証を授与されることとなった。また、今年度の多文化共生特論（クロスカルチャートーク）は11/9(土)大幸キャンパスで開催され、医学系研究科（保健）の学生が中心に企画・運営にあたり非常に活躍した。

4) 国際交流

学部：令和元年度についても、日本学生支援機構「海外留学支援制度」からの補助金を獲得することができ、延世大学（2名）、上海交通大学（2名）、シンガポール国立大学（4名）において病院実習、授業や演習への参加などの短期留学（8～10日間）を行った。海外からの学部生等の受入については、延世大学から2名、上海交通大学から2名、シンガポール国立大学から4名が来学し、約1週間の病院見学、授業への参加などのプログラムに参加した。ちなみに、これら留学生の受け入れに関しては、学生の国際交流ボランティアサークル SNUPY が中心となって、多くの学部生を巻き込んだ留学生との文化的交流が行われている。

大学院：名古屋大学-延世大学間学術研究集会は、令和元年度は延世大学において11月1日に開催した。本専攻からは、3名の大学院生が発表し、そのうち2名は引き続き施設・病院見学や研究室訪問を行った。延世大学からは11月下旬に大学院生2名が来学し病院等の施設見学や大学院生ゼミの参加等を通して本学大学院生や教員との交流を行った。

5) 感染対策

保健学科感染対策委員会の方針に準じながら、看護学専攻における実習時期や内容に合わせて感染予防対策を行っている。専攻内感染対策委員を中心に感染症抗体価検査の実施と結果の確認、ワクチン接種状況の把握、胸部レントゲン写真の結果の把握等に努め、各実習前にこれらの結果を病院の研修担当部門に報告している。また、実習中も学生に対して感染予防対策の徹底を図るとともに担当教員を中心に学生の健康状態の把握に努め、看護部や病院の感染部門と連携しながら、感染の予防や拡大を防ぐ活動を行っている。学内においても学生に対してガイダンス等で感染予防教育を行うとともに、インフルエンザワクチン接種の勧奨やインフルエンザの感染状況の把握に努めている。

3. 研究活動

看護学専攻教員は、各自主要な研究テーマに取り組み、科学研究費等の外部資金を得ながら研究活動をより遂行することに努めた。教授・准教授・講師による研究内容の一部を以下に示す。

太田 勝正：

看護情報学・情報プライバシーに関する研究、看護倫理および道徳的感受性の育成のための教育法の研究、患者の尊厳に関する研究、放射線看護・放射線防護に関する研究

本田 育美：

慢性の病をもつ人の健康行動（セルフマネジメントや疾病管理）に関する研究、高齢者のヘルスプロモーションに関する研究、看護師の臨床推論に関する研究

大島 千佳：

看護技術の検証と開発、睡眠に関する研究、血液およびリンパに関する研究

竹原 君江：

糖尿病足病変に対する予防的フットケア技術の開発に関する研究

竹野ゆかり(9月～)：

動物実験を用いたリンパ浮腫ケアに関する研究、創傷治癒に関する研究

安藤 詳子：

がん患者家族の喪失と悲嘆に対する支援に関する研究、がん患者の症状マネジメントに関する研究、外来がん看護面談における看護師アシストツールの開発、がん患者の意思決定

支援に関する研究，地域包括緩和ケア促進に関する研究

佐藤 一樹：

緩和ケアの質評価方法の開発，ビッグデータを用いた終末期医療の実態調査，がん・非がん終末期の QOL や医療の質評価，緩和ケアの提供体制に関する研究

池松 裕子：

循環危機患者の自覚症状，クリティカルな状態の患者の QOL，発達障害のある看護学生の学習支援プログラム開発，ICU 患者の褥瘡リスクアセスメントツール開発

中山 奈津紀：

自律神経活動指標に関する研究、循環器疾患患者の生活支援に関する研究、消化器症状を訴える患者の生活支援に関する研究、周術期におけるせん妄に関する研究、運動と血液循環に関する研究、シミュレーション教育に関する研究

青石 恵子：

精神障害者における長期入院患者の地域移行支援に関する研究，中学生の自殺親和性に関する研究，中学生におけるケアの概念とケア専門職に対する認識

浅野 みどり：

Special needs をもつ子どもと家族の看護，家族の価値観と強みを尊重した養育期の家族への予防的ケア，子どもと家族の Well-being の探求

新家 一輝(10月～)：

きょうだい，小児がん等慢性疾患，重症心身障害，小児緩和ケアをテーマとした病気や障害をとまなう子どもと家族のニーズと看護に関する研究

玉腰 浩司：

生活習慣病に関する研究，母子保健に関する研究，婦人科疾患・周産期疾患に関する研究

入山 茂美：

母乳育児に関する研究，産痛緩和ケアに関する研究，思春期の若者の性行動に関する研究，国際母子保健に関する研究

島 明子：

女性のヘルスケアに関する研究，地域の繋がりを活用した更年期ケア提供モデルの開発、

周産期ケアに関する研究

高橋 由紀：

哺乳探索行動と母子相互作用に関する研究, Skin-to-skin contact に関する実証的研究

西谷 直子：

生活習慣・職場ストレスと心身の健康に関する研究, 職場の健康管理

林 登志雄：

訪問看護と在宅医療の研究, 終末期の医療と看護の研究, 細胞老化と動脈硬化症の研究, 高齢者糖尿病コホート研究と治療ガイドライン作成, 遺伝性(家族性)高脂血症研究, 東アジア女性健康長寿研究

星野 純子：

在宅療養者と家族介護者への健康支援に関する研究, 看護師のキャリア発達に関する研究, 地域住民の認知症恐怖に関する研究

淵田 英津子：

認知症高齢者のケアに関する研究, 認知症高齢者の介護者支援に関する研究, 高齢者ケアの教育方法と評価に関する研究

中柄 昌弘：

がんや生活習慣病に関するゲノムデータ解析, 健診ビッグデータを用いた生活習慣病・精神疾患発症予兆予測システムの開発, 看護学データのデータサイエンス

4. 対外的活動

1) 国立大学保健医療学系代表者協議会

国立大学保健医療学系代表協議会が令和元年6月3日に, 同協議会看護学分科会が同年6月2日に, いずれも沖縄県那覇市で開催された。教員定員の削減の問題、文科省から示されたモデル・コア・カリキュラムの活用等, 各大学で抱える課題について議論が行われた。

2) 日本看護系大学協議会総会

日本看護系大学協議会定時社員総会が, 令和元年6月14日に東京で開催され, 日本看護学教育評価機構の開設, JANPU ナースプラクティショナーの資格認定の仕組みなどについて、

説明及び審議がなされた。

(主任：安藤 詳子)

医療技術学専攻 医用量子科学講座・放射線技術科学専攻（平成 31 年度及び令和元年度）

医療技術学専攻医用量子科学講座（放射線技術科学専攻）における教育と研究目標は以下の通りである。

- ・ さまざまな画像診断技術（CT、MRI、X 線、核医学装置、US など）の原理や特性を理解し、安全・確実に機器の能力を最大限発揮できるようにする。
- ・ 治療のために、人体に的確に放射線を照射できるようにする。
- ・ 放射線が人体に及ぼす影響について幅広い知識と応用力を身につける。
- ・ 専門知識に加え、豊かな人間性を合わせ持つ人材を育成する。
- ・ 日進月歩する医療分野の進歩を理解し、指導的立場となる医療技術者および放射線技科学を学ぶ人々を指導する人材を育成する。
- ・ 自ら医療の進歩を創出し世界的な研究の一翼を担うことができる研究者を育成する。

1. 運営

医療技術学専攻医用量子科学講座（放射線技術科学専攻）放射線画像診断、放射線治療、線量測定、機器開発などの研究領域ならなる大講座制で、講座主任を中心に講座の教員全員が参加する毎月 1 回の講座会議の審議・決定に従って行われている。また講座の教授で構成される教授会も必要に応じて開催されている。

2. 教育活動

学部教育：

令和元年度の学生は、1 年生が 40 名、2 年生は 39 名、3 年生は 40 名、4 年生は 42 名で、4 年生は指導教員のもと、それぞれの研究室で卒業研究を行った。第 72 回診療放射線技師国家試験（令和 2 年 2 月 20 日実施）は 4 年生 39 名が受験し、そのうち 37 名が合格した（合格率 95%）。卒業生 39 名の進路は、医療機関に 25 名、大学院進学が 11 名、一般企業 3 名であった。学部教育は、専任教員による授業の他に、非常勤講師を招いた特別講義、臨床実習など、将来医療現場で役に立つ教育活動が行われている。また、研究力の強化のため 3 年後期から卒業研究のための研究室配属を行っている。

大学院教育：

令和元年度は前期博士課程 1 年 11 名、2 年 11 名、後期博士課程 1 年 3 名、2 年 2 名、3 年 4 名であった。前期課程では 11 名が修士論文を提出し、修士の学位を取得した。学

生名と修士論文題目を記す。

・小栗 良太

細胞質の酸化還元状態と ^{64}Cu -ATSM の細胞集積に関する検討

・加藤 沙奈恵

安静時機能的磁気共鳴画像法の再現性の検討ーチャンネル数の異なる受信コイル使用時の再現性の検討、撮像時の頭の動きが再現性に与える影響の検討ー

・川田 晃平

定位放射線治療装置における新しい高精度線量計算アルゴリズムの評価

・北尾 洋平

放射線照射により生じる水の微弱な発光とチェレンコフ光の伝搬特性の評価

・木村 浩都

CZT 検出器を用いたエネルギー弁別型フォトンカウンティングマンモグラフィシステムにおける検出器の特性の検討

・清水 陽人

高エネルギー水吸収線量における横打ち水槽入射壁の撓み量の評価

・竹川 弘基

低酸素イメージング用 PET 薬剤の集積とがん細胞のがん幹細胞性獲得の関係に関する研究

・田之上 和矢

X 線 CT 画像の雑音分散に与える検出器モデルの影響

・長谷川 千夏

骨転移に対する RI 内用療法の治療効果判定：骨 SPECT, ^{18}F -fluoride PET/CT, ^{18}F -FDG PET/CT 画像から測定した半定量的指標の比較

・長谷川 智也

非イオン性ヨード剤の副作用に関する量子化学的研究

・平松 倭加彦

^{64}Cu -ATSM の組織集積に対する投与量の影響

後期課程では 1 名が博士論文を提出し、博士の学位を取得した。学生名と博士論文題目を記す。

・Majuwana Gamage Roshani Sandamini Perera :

Evaluation of morphological and hemodynamic biomarkers to assess rupture risk of intracranial aneurysms using magnetic resonance fluid dynamics and computational fluid dynamics

3. 研究活動

当専攻の教員は幅広い専門分野を研究領域としているため、個々の教員が独自の研究活動を行っている。以下に各教員の研究領域を示す。

・池田充 教授 :

被ばく線量と画質との関係に関する研究。医用画像の画質評価に関する研究。

・礪田治夫 教授 :

磁気共鳴 (MR) を用いた脳機能解析・血流解析 (特に脳動脈瘤)・心筋運動解析に関する研究。サーモサイフォン効果を具備した凍結治療プローブ開発。MR 撮像技術・MR 画像診断ならびに神経系・頭頸部画像診断に関する研究。

・今井國治 教授 :

数理統計学及び情報理論を用いた医用画像の画質評価法の構築。造影剤の薬物物性及び造影特性に関する研究。

・加藤克彦 教授 :

ポジトロン核医学に関する研究。核医学画像診断。甲状腺機能亢進症の ^{131}I 内用療法。 ^{18}F -FDG、 ^{18}F -DOPA、 ^{11}C -choline、 ^{11}C -methionine、 ^{18}F -FLT、 ^{18}F -Na 等を利用した腫瘍 PET/CT に関する研究。 ^{123}I -IMP を使用した SPECT 検査における新しい低侵襲性脳血流定量測定法の確立に関する研究。各種核医学検査における定量測定に関する研究。

・島本佳寿広 教授 :

乳腺の画像診断に関する研究。超音波装置のディスプレイの性能および環境が病変検出に及ぼす影響に関する研究。読影環境と疲労度との関連に関する研究。読影医の診断論理の妥当性を検証する研究。

・古川高子 教授 :

放射性同位元素を用いる分子イメージングに関する基礎研究 ; (a) 腫瘍イメージングのための分子プローブの開発・評価、(b) 標的アイソトープ治療に向けた分子プローブの開発・評価。

・山本誠一 教授 :

PET 装置, ガンマカメラ, 複合イメージング装置などの医療機器の研究開発。放射線治療に関係したイメージングに関する研究。

・小口宏 准教授 :

電子線計測法(水吸収線量計測、相互校正法)に関する研究、ポリマーゲル計測法の臨床応用に向けた開発、呼吸同期放射線治療に関する精度評価、画像誘導放射線治療(IGRT)に関する精度評価。産業総合技術研究所との共同研究「フィールドにおける高エネルギー電子線水吸収線量校正の不確かさ評価と相互校正手順の標準化」に参画。

・小森雅孝准教授 :

陽子線治療における新規照射野形成法の開発。陽子線治療における中性子被ばくに関する研究。高エネルギーX線治療計画装置の線量分布計算精度の評価。

・小山修司准教授 :

診断領域 X 線の計測法の研究。X 線 CT の患者・術者の被ばく線量計測。診断領域 X 線のエネルギー計測。マンモグラフィにおける線量計測。新型マンモグラフィ装置の開発。MR 撮像技術に関する研究。

・砂口尚輝准教授 :

生体軟組織を高感度に撮像するための位相コントラスト X 線 CT の開発。蛍光 X 線 CT の開発

・平野祥之准教授 :

重粒子線治療における生物学的効果に関する研究。重粒子線モンテカルロ計算における精度の検証

・川浦稚代 講師 :

人体ファントム計測システムを用いた医療被ばくの測定・評価。日本人乳幼児人体ファントムの開発。X 線 CT 検査における画質と線量の関係解明。

・藤井啓輔 講師 :

実測およびシミュレーション計算に基づいた放射線診断検査における被ばく線量評価。画質および線量評価に基づいた CT 撮影条件の最適化に関する研究。

・福山篤司 助教 :

MR 装置を用いた血管内血流動態の計測精度の検証と改善。Readout Segmented-Echo

Planar Imaging を用いた QSI 解析。RESOLVE シーケンスで得られる ADC の精度検証

・余語 克紀 助教：

放射線による水の発光を用いた放射線治療品質管理ツールの開発。放射線照射による生体分子の損傷解析と修飾薬剤の放射線治療への応用に関する研究。

・菅博人 助教：

MRI による脳内の鉄沈着を中心とした頭蓋内環境評価の手法開発や評価に関する研究。
MRI から得られる定量画像の画像誘導放射線治療への応用に関する研究。

4. 対外的な、または社会に関わりある活動。

- 1) 日本生体医工学会の代議員を務めた (池田)。
- 2) 日本生体医工学会東海支部の副支部長を務めた (池田)。
- 3) 日本医学放射線学会中部地方会世話人を務めた (池田)。
- 4) 公益社団法人日本医学放射線学会の代議員を務めた (磯田)。
- 5) 公益社団法人日本医学放射線学会中部地方会の世話人を務めた (磯田)。
- 6) 日本神経放射線学会の評議員を務めた (磯田)。
- 7) 一般社団法人日本磁気共鳴医学会の代議員を務めた (磯田)。
- 8) 4D FLOW 研究会の代表世話人を務めるとともに、第 1 回 4D FLOW 研究会学術集会を企画・運営した (磯田)。
- 9) 国際凍結治療学会 (International Society of Cryosurgery, ISC) の理事を務めた (磯田)。
- 1 1) 日本低温医学会の理事を務めた (磯田)。
- 1 2) 日本生体医工学会東海支部の支部理事を務めた (磯田)。
- 1 3) 東海総合画像研究会の世話人を務めた (磯田)。
- 1 4) 東海神経放射線勉強会の世話人を務めた (磯田)。
- 1 5) 脊椎・脊髄画像クラブの世話人を務めた (磯田)。
- 1 6) ニューロイメージングカンファレンスの世話人を務めた (磯田)。
- 1 7) 「ポスト『京』重点課題②『個別化・予防医療を支援する統合生命科学』」の諮問委員を務めた (磯田)。
- 1 8) 一般社団法人日本核医学会の庶務担当理事を務めた (加藤)。
- 1 9) 一般社団法人日本核医学会の評議員を務めた (加藤)。
- 2 0) 一般社団法人日本核医学会健保委員会の委員長を務めた (加藤)。
- 2 1) 一般社団法人日本核医学会編集委員会の委員を務めた (加藤)。

- 2 2) 一般社団法人日本核医学会リスクマネジメント指針改定ワーキンググループの委員を務めた(加藤)。
- 2 3) 一般社団法人日本核医学会各賞選考委員会の委員を務めた(加藤)。
- 2 4) 一般社団法人日本核医学会予算委員会の委員を務めた(加藤)。
- 2 5) 一般社団法人日本核医学会派遣委員(内科系学会社会保険連合委員)を務めた(加藤)。
- 2 6) 一般社団法人日本核医学会派遣委員(内科系学会社会保険連合放射線関連委員会委員)を務めた(加藤)。
- 2 7) 一般社団法人日本核医学会派遣委員(内科系学会社会保険連合悪性腫瘍関連委員会委員)を務めた(加藤)。
- 2 8) 一般社団法人日本核医学会派遣委員(内科系学会社会保険連合遠隔医療関連委員会委員)を務めた(加藤)。
- 2 9) 一般社団法人日本核医学会派遣委員(外科系学会社会保険委員会連合実務委員会、手術委員会委員)を務めた(加藤)。
- 3 0) 公益社団法人日本医学放射線学会の代議員を務めた(加藤)。
- 3 1) 公益社団法人日本医学放射線学会編集委員会委員を務めた(加藤)。
- 3 2) ヨーロッパ放射線学会(ECR)期間中に行われた、日独放射線交流計画・日独合同幹事会に出席し、第21回日独放射線交流計画の事務局長としてドイツの放射線科医と学術・文化交流を行った(加藤)。
- 3 3) 北米放射線学会(RSNA)期間中に行われた、日独放射線交流計画・日独合同幹事会に出席し、第21回日独放射線交流計画の事務局長としてドイツの放射線科医と学術・文化交流を行った(加藤)。
- 3 4) 日本核医学会において、理事会、評議員会、健保委員会に出席し活動を行った(加藤)。
- 3 5) 日本核医学会中部地方会の世話人を勤めた(加藤)。
- 3 6) 日本医学放射線学会において代議員会、編集委員会に出席し活動を行った(加藤)。
- 3 7) 日本医学放射線学会において、代議員会、編集委員会に出席し活動を行った(加藤)。
- 3 8) 日本医学放射線学会秋季臨床大会において、代議員会、編集委員会に出席し活動を行った(加藤)。
- 3 9) 東海核医学セミナーの事務局、世話人を務めた(加藤)。
- 4 0) 東海腫瘍核医学研究会の世話人を務めた(加藤)。
- 4 1) 東海脳神経核医学研究会の世話人を務めた(加藤)。
- 4 2) 東海循環器核医学研究会の世話人を務めた(加藤)。
- 4 3) 愛知診断治療技術振興財団の評議員を務めた(加藤)。
- 4 4) 愛知診断治療技術振興財団の理事を務めた(加藤)。
- 4 5) 愛知県放射線科医会常任理事を務めた(加藤)。

- 4 6) 愛知甲状腺研究会の世話人を務めた (加藤)。
- 4 7) 名古屋 PET 症例検討会の運営委員を務めた (加藤)。
- 4 8) ニューロイメージングカンファレンスの運営委員を務めた (加藤)。
- 4 9) 米国核医学会 (SNM) に出席し、研究発表を行うとともに学術・文化交流を行った (加藤)。
- 5 0) ヨーロッパ核医学会 (EANM) に出席し、研究発表を行うとともに学術・文化交流を行った (加藤)。
- 5 1) 北米放射線学会 (RSNA) に出席し、学術・文化交流を行った (加藤)。
- 5 2) 第 72 回診療放射線技師国家試験 試験委員を務めた (加藤)。
- 5 3) PET サマーセミナー in 下呂の実行委員長として企画、運営に携わった (加藤)。
- 5 4) 愛知 PET 講演会において特別講演を行った (18F-FDG PET/CT の有用性とピットフオール) (加藤)。
- 5 5) 名古屋三友会例会において特別講演を行った (Positron emission tomography (PET) による癌診断の現状と新しい放射線治療) (加藤)。
- 5 6) 愛知バセドウ病治療医療連携講演会において特別講演を行った (バセドウ病 RI 内用療法の現状) (加藤)。
- 5 7) 第 55 回日本医学放射線学会秋期臨床大会において教育講演を行った (認知症の核医学検査: 脳血流 SPECT を中心に) (加藤)。
- 5 8) 臨床複雑系・フラクタル解析学会評議員、リスクマネジメント部長を務めた (加藤)。
- 5 9) 公益社団法人日本放射線技術学会と一般社団法人日本医学物理学会の共同英語論文誌 "Radiological Physics and Technology" (RPT) 誌の編集委員として編集に従事した (山本)。
- 6 0) 英国マンチェスターで行われた 2019 Nuclear Science Symposium and Medical Imaging Conference のプログラム委員を務めた (山本)。
- 6 1) 2019 医学物理士セミナー@名古屋 「放射線治療と磁気共鳴画像・核医学画像」でセミナー講師として講演を行った (山本)。
- 6 2) 名古屋大学理学部主催「イメージング研究会」において招待講演を行った (山本)。
- 6 3) 日本応用物理学会における複数の賞の審査員を行った (山本)。
- 6 4) 福島県立医科大学 ふくしま国際医療科学センターにおいて α 線イメージング装置に関する招待講演を行った (山本)
- 6 5) 米国核医学会 (SNM) に出席し、研究発表を行うとともに学術・文化交流を行った (山本)
- 6 6) 英国マンチェスターで行われた 2019 Nuclear Science Symposium and Medical Imaging Conference に出席し、座長、研究発表を行うとともに学術・文化交流を行った (山本)

- 67) 中国、杭州で行われた Photonics Asia に出席し、研究発表を行うとともに学術・文化交流を行った (山本)
- 68) 公益社団法人日本放射線技術学会代議員として、会の運営に参画した (小山)。
- 69) 公益社団法人日本放射線技術学会出版委員として、会の出版事業に参画した (小山)。
- 70) 公益社団法人日本放射線技術学会計測部会委員として、会の企画・運営に参画した (小山)。
- 71) 公益社団法人日本放射線技術学会中部支部監事として、会の運営に参画した (小山)。
- 72) 中部放射線医療技術学術大会運営委員会委員として、会の企画・運営に参画した (小山)。
- 73) 日本 CT 技術学会理事として、会の企画・運営に参画した (小山)。
- 74) 国際計量研究連絡委員会放射線標準分科会専門委員として、本邦における放射線計量標準の運営に参画した (小山)。
- 75) 公益社団法人医学物理学会の理事、計測委員として学会の企画・運営に関わった (小口)。
- 76) 公益社団法人日本放射線技術学会の評議員・放射線治療専門部会委員長として学会の企画・運営に関わり、専門部会 2 回、放射線治療セミナーを 3 回開催した (小口)。
- 77) 公益社団法人日本放射線技術学会の第 78 回、第 79 回放射線治療部会で座長を行った (小口)。
- 78) 公益社団法人日本放射線技術学会の第 52 回、第 53 回放射線治療セミナーで座長を行うとともに、第 54 回では電子線相互校正法の講演と実技講習を行った (小口)。
- 79) 公益社団法人日本放射線技術学会の RPT 誌編集委員として学会誌の編集・査読を行った (小口)。
- 80) 公益社団法人日本放射線技術学会の学術委員として研究、教育、学会の企画、提案を行った (小口)。
- 81) 公益社団法人日本放射線技術学会関東部会の関東 RT 研究会副代表として会の企画・運営に関わり、セミナーを 5 回、シンポジウムを 1 回開催した (小口)。
- 82) 一般財団法人医学物理士認定機構の評議員・教育委員・広報委員として会の企画・運営に関わり、医学物理士認定、医学物理教育コース認定を行い、教育講演会を 2 回開催し、「放射線治療品質管理プログラム」についての講演を西宮市と東京都で行った (小口)。
- 83) 放射線治療品質管理士認定機構の理事として会の企画・運営に関わり、放射線治療品質管理講習会を 2 回開催、認定試験と認定審査を行った (小口)。
- 84) 公益社団法人日本放射線腫瘍学会の物理技術 WG 代表として会の企画・運営に関わった (小口)。
- 85) 日本放射線治療専門放射線技師認定機構の理事・出版委員・学術委員として会の企

- 画・運営に関わり、認定事業、教育セミナー開催、機関誌発行を行った（小口）。
- 8 6) 令和元年度放射線治療専門放射線技師認定機構のセミナー講師（電子線計測）を行うと共に認定試験問題の作成、認定試験の実施を行った（小口）。
- 8 7) 日本放射線治療専門放射線技師認定機構統一講習会基礎コース（関東1地区、関東2地区、東海地区）で電子線計測法の講演、計測実習を行った（小口）。
- 8 8) 令和元年度放射線治療専門放射線技師認定機構の認定指導者実機講習会（キャノンメディカル那須工場）の企画立案を行い、相互校正法の講演および実技指導を行った（小口）。
- 8 9) 第72回診療放射線技師国家試験の試験委員として国家試験実施に参画した。
群馬県立県民健康科学大学大学院診療放射線学研究科の博士論文研究審査委員会委員として学位審査を行った（小口）。
- 9 0) 国立がん研究センターがん対策情報センターのアドバイザーパネル委員として、放射線治療の安全対策に参画した（小口）。
- 9 1) 公益社団法人医用原子力技術研究振興財団の医療放射線管理委員会の委員として医用放射線の安全利用と管理にいて参画した（小口）。
- 9 2) 公益社団法人医用原子力技術研究振興財団の医療用線量等校正部会の委員として高エネルギー放射線のトレーサビリティ管理に参画した（小口）。
- 9 3) 長野赤十字病院放射線治療管理委員会の外部委員として2回の会議に参画した（小口）。
- 9 4) 岐阜県立多治見病院放射線治療管理委員会の外部委員として2回の会議に参画した（小口）。
- 9 5) 社会医療法人財団新和会 八千代病院放射線治療管理委員会の外部委員として3回の会議に参画した（小口）。
- 9 6) 東海放射線腫瘍研究会技術部会の幹事として、研究会を4回開催した（小口）。
- 9 7) 公益社団法人日本放射線技術学会と一般社団法人日本医学物理学会の共同英語論文誌“Radiological Physics and Technology”（RPT）誌の編集委員を務めた（小森）。
- 9 8) 東海放射線腫瘍研究会技術部会の幹事として会の運営を務めた（小森）。
- 9 9) 計測自動制御学会の会誌出版委員を務めた（砂口）。
- 1 0 0) 計測自動制御学会・センシングフォーラム運営委員を務めた（砂口）。
- 1 0 1) 一般社団法人日本医学物理学会の防護委員会の委員を務めた（藤井）。
- 1 0 2) 日本放射線技術学会中部支部 MRI 研究会の世話人を務め、研究会を開催した（菅）
- 1 0 3) 日本放射線技術学会総会学術大会にて座長を務めた（菅）
- 1 0 4) International Society for Magnetic Resonance in Medicine (ISMRM) に出席し、研究発表を行うとともに学術・文化交流を行った（菅）
- 1 0 5) 日本放射線技術学秋季学術大会にて座長を務めた（菅）

(主任：山本 誠一)

医療技術学専攻 病態解析学講座・検査技術科学専攻（平成 31 年度及び令和元年度）

病態解析学講座では、正常ならびに病的状態における生体の諸現象をさまざまな専門分野からアプローチし、得られた情報を解析、統合し、医学ならびに保健学を推進するために有用な生体情報についての学術理論の展開や、新たな技術の開発およびその応用を教授・研究している。

平成 24 年 4 月には名古屋大学大学院医学系研究科(保健学)での大学院講座化が実現し、病態解析学講座は新体制のもとで研究、教育の礎を着実に構築してきた。

本講座は、環境病因解析学、病態化学解析学、病因病態解析学、生体生理解析学、形態情報解析学、分子病態解析学からなる。

この 6 つの学問領域が先端的な研究、学際的な病態解析、技術開発を進めるとともに、指導的医療人として、高度化・多様化する医療の動向を見据え、病態解析学研究を遂行できる能力の育成を推進している。

また教育の目標としては、社会の急激な変化に対応可能な俯瞰力や独創力に加え、チーム医療の積極的な推進、また産学官にわたりグローバルに活躍できる能力をもった、我が国の未来の保健医療を創る人材の育成を掲げている。

1. 運営

本講座は、環境病因解析学、病態化学解析学、病因病態解析学、生体生理解析学、形態情報解析学、分子病態解析学の 6 つの学問領域からなる大講座であり、運営に関しては、領域間の壁をなくして一体化した体制を築いてきた。講座の運営は、講座主任（長坂）を中心に、全 15 名の教員が参加する講座会議の審議・決定に従って行われている。講座会議は、第 1、第 3 水曜日の 12 時、ならびに第 4 水曜日の 17 時から定期的に行われ、必要に応じて臨時に開催されている。

2. 教育活動

1) 4 月に第 22 期の入学生 41 名（推薦入学生 17 名、前期日程入学生 24 名）を迎えた。

2) 4 月 1 日（月）の新入生ガイダンスには、教員と 1 年生全員が参加し、専攻の教育と学生生活に関するガイダンス、教員の自己紹介と指導教員の確認、学生の自己紹介などが行われた。

3) 感染対策

本学では入学時に風疹ウイルス、麻疹ウイルス、ムンプスウイルス、水痘ウイルス、B型肝炎ウイルスに対するワクチン接種を義務づけており、新年度開始時におこなわれる1~4年生の各学生ガイダンスの際に、感染予防の意義およびワクチン接種の重要性について指導するとともに各種ワクチンの接種状況を確認した(林由美講師)。さらに、3年次に行われる病原微生物学実習時では、感染防止への心得として「感染の成立と感染経路」や「滅菌と消毒」について、再度講義をおこなうとともに、初回実習時には衛生的手洗いの演習を導入するなど、学生実習における感染予防にも努めた(川村久美子准教授)。また、3年生の臨地実習前には、全員がワクチン接種および抗体検査を終了し、名古屋大学医学部附属病院での臨地実習受け入れ基準を満たしていることを再度確認するとともに、臨地実習直前におこなわれるガイダンスにおいては、臨床検体を扱う上での感染予防対策実施の意義、標準予防策および感染経路別予防対策の実施方法について指導し、さらに各種感染症診断のための検査方法とワクチン接種の意義についての講義もおこなった(川村久美子准教授)。

4) 4月24日(水)には検査技術科学専攻の2年生が中心になって、教員と共に新入生歓迎会を大幸厚生会館にて開催した。

5) 5月8日(水)には第18期生の臨地実習を充実させることを目的に、病態解析学講座教員、医学部附属病院検査部の教員および技師との実習前の合同会議(第1回臨床検査専門委員会)を開催した。臨地実習は12月9日(月)から2月21日(金)まで医学部附属病院(検査部・輸血部・病理部)で実施された。

6) オープンキャンパス

8月9日(金)に大幸キャンパスで実施し、申込者数220名に対して来場高校生数は201名であった。検査技術科学専攻の説明、教育カリキュラム、教育の目標と内容、特色と卒業後の進路の説明、卒業生からの講演を企画した。その後、参加者が研究室を訪ね、教員や院生による研究内容などの説明および顕微鏡を用いた観察などを体験した。同様の内容で午前・午後ともに2時間ずつ実施したが、アンケート結果より参加者の満足を確認でき、有意義なオープンキャンパスを実施できた。

7) 8月28日(水)に大学院医学系研究科博士課程(前期課程)の入学試験を実施し、医療技術学専攻病態解析学分野では13名の合格者(全員一般選抜)を決定した。また、8月29日(木)に同分野博士課程(後期課程)の入学試験を実施し、3名の合格者(一般選抜2名、社会人1名)を決定した。

8) 令和2年2月4日(火)には私費留学生入学試験を実施し、1名が合格した。

9) 令和2年3月には、本専攻の第19期生の43名が卒業した。そのうち12名については進学【9名が大学院博士前期課程（医学系研究科病態解析学分野）、1名が本学大学院創薬科学研究科基盤創薬学専攻、2名が他大学大学院】し、31名については公立病院、一般病院の検査部門、検査センターおよび民間企業に就職した。大学院医学系研究科病態解析学分野（博士前期課程）の第17期生の14名全員が修了した。また前期課程修了者のうち2名が本学大学院博士後期課程に進学した。前期課程修了者は大学病院や一般病院の検査部門、および民間企業に就職し、就職率は100%であった。博士課程（後期課程）では2名が修了し、1名他大学、1名公的病院に採用された。

10) 臨床検査技師国家試験に対する準備として、全教員による教育指導と6回の模擬試験を実施した。第66回国家試験（令和2年2月29日実施）の新卒および既卒者の合格者数は各々、40/43（合格率93.0%）、0/3（合格率0%）であった。

11) 教育活動の成果として、竹腰正広（M1）は第14回日本臨床検査教育学会学術大会で優秀発表賞を受賞した。

3. 研究活動

本専攻では4月に博士課程（前期課程）に9名の第18期生、博士課程（後期課程）に2名の第16期生を迎えた。

令和2年1月26日（日）に修士論文発表会を開催し、前期課程第17期生14名が成果を発表した。

学部関係では7月28日（日）に、第19期生による卒業研究発表会が開催された。以下に各部門における卒業研究発表演題を示す。

【生体生理解析学部門-1】 指導教員：永田浩三

1. メタボリックシンドローム病態と加齢に伴う血管機能評価
2. ウコンエキ스는メタボリックシンドロームラットにおいて心筋および皮下脂肪炎症を抑制する

【分子病態解析学部門】 指導教員：早川文彦 田村彰吾

3. 急性リンパ性白血病で認められたZNF384融合タンパクの機能解析
4. 血友病Aの病態・創薬研究に向けたiPS細胞由来血管内皮細胞作製法の基礎的検討
5. 血液凝固第Ⅷ因子遺伝子の逆位解析法の最適化

6. MEF2D 融合蛋白分解を誘導する薬剤をスクリーニングするシステムの開発

【生体生理解析学部門-2】 指導教員：平山正昭

7. パーキンソン病と腸内細菌叢の関与

8. パーキンソン病の腸内発症に関わる消化管ペプチドや腸管免疫の関与

9. 腸管 α -Synuclein の局在探索

10. 下剤センノシドによる腸管組織評価

【病態化学解析学部門】 指導教員：佐藤光夫 上山 純

11. 高酸化アルブミン血清を対象とした改良型 BCP 法の正確性評価

12. クラウドソーシングによる蚊の省力的空間分布把握システムの活用：システム開発と発生予測モデル作成の予備検討

13. バイオモニタリングによる家庭用ピレスロイド系殺虫剤の曝露レベル推定とリスク評価の試み

【病因病態解析学部門】 指導教員：川部勤 川村久美子 松島充代子

14. NC/Nga マウスの抗体産生を特徴づける B 細胞の分化の解析

15. 抗原特異的 IgE 非依存的なアレルギー性結膜炎の発症機序の解析

16. 気道炎症モデルの構築と異種の表現型を併せ持つ細胞集団の解析

17. Toll-like receptor 7 を介する炎症におけるアセタミプリドの免疫修飾作用

【環境病因解析学部門】 指導教員：近藤高明

18. 1 細胞 RNA-seq に対する確率生成モデルを用いた遺伝子発現量の解析手法の検討と応用

19. 都市部在住の健常成人集団における健康食品摂取と生活習慣の関連性

20. 都市部在住の健常成人集団における身体活動推定量と生活習慣の関連性

都市部在住の健常成人集団における精神健康指標と生活習慣の関連性

【形態情報解析学部門】 指導教員：長坂徹郎 川井久美 橋本克訓

21. 浸潤性乳癌の病理診断におけるバーシカン発現の有用性について

22. 免疫染色と FISH を用いた甲状腺乳頭癌における病理学的所見と遺伝子変異との相関の探索

【環境病因解析学部門】 指導教員：石川哲也 林由美

23. 食餌性因子、遺伝的背景が肝障害の重症度に与える影響について

【病因病態解析学部門】 指導教員：川部勤 川村久美子 松島充代子

24. 次世代シーケンサーによる肺炎桿菌の網羅的解析

【病態化学解析学部門】 指導教員：佐藤光夫 上山 純

25. UHRF1 の肺癌におけるバイオマーカーとしての可能性とノックダウンによる増殖抑制作用の検討

4. 対外的な、または社会に関わりある活動

A) 国際交流

開始以来 10 年目を迎えた延世大学（韓国）との国際交流事業では、10 月 31 日～11 月 2 日に延世大学で行われ、病態解析学講座からは 2 名の大学院生（竹腰正広、藤枝愛生）が研究成果について口頭発表と質疑応答を行なった。川部 勤教授と松島充代子講師が同行して、1 日昼には今後の交流事業の課題について名古屋大学と延世大学の各専攻の教員が集まり協議した。交流会終了後、大学院生はさらに 11 月 7 日まで韓国に滞在し、研究室訪問などを行なった。2020 年 2 月 14 日から 21 日まで、延世大学の大学院生 2 名が本学を訪問し、研究交流を行う予定であったが、新型コロナウイルス感染拡大の影響により中止となった。この交流事業組織委員会には国際交流委員の近藤高明教授と松島充代子講師が出席し、企画や運営の役割を担った。

近藤高明教授は、9 月 8～16 日にタイのマヒドン大学アセアン保健開発研究所の協力のもとで実施された「第 5 回タイ保健学科医療体験入門プログラム」の責任者として、プログラム全体の企画と学生の引率を行った。プログラムには 14 名の学生と 3 名の引率教員が参加したが、うち 4 名は検査技術科学専攻（2 年生 1 名、3 年生 3 名）、1 名は病態解析学講座（M2）在籍学生であった。研修期間中には農村部でのヘルスセンター、郡レベルや県レベルでの病院、民間のクリニック、タイ最大の医療機関であるシリラート病院と附属医学博物館、農村部でのヘルスボランティア活動現場、マヒドン大学検査技術科学部、タイ国地域包括ケア開発プロジェクト事務所（JICA）、Grand Palace や Siam Museum などの文化施設を訪問・見学し、医療機関スタッフ、大学教員・学生、現地で活躍する日本人スタッフと交流を行うと同時にタイの歴史と文化を学んだ。

佐藤光夫教授は、9 月にスペイン・バルセロナで開催された第 20 回世界肺癌学会議において共同演者として 3 演題のポスター発表を行った。また、国際英文雑誌・Cancer Cell International 誌の associate editor および Experimental and Therapeutic Medicine 誌の editor として編集に参画した。また、香港大学 学外学位審査委員 を務めた。

川部 勤教授と松島充代子講師は、6月に開催された The 20th International Conference on Solid State Sensors and Actuators において共同研究者として2題のポスター発表を行った。また、9月に開催された 45th International Conference on Micro & Nano Engineering において共同研究者として3題のポスター発表を行った。9月に開催された 28th Congress of Interasthma Japan North Asia において指導大学院生1名（口演）の発表を指導した。10月に開催された 17th Congress of the International Union of Immunological Societies では指導大学院生5名（ポスター）の発表を指導した。また、松島充代子講師は同学会においてポスター発表を行った。10月に 32nd International Microprocesses and Nanotechnology Conference において共同研究者として1題のポスター発表を行った。1月に開催された The 33rd International Conference on Micro Electro Mechanical Systems において共同研究者として1題のポスター発表を行った。

早川文彦教授は、12月に米国フロリダで行われた第55回米国血液学会年次総会に出席し、大学院生のポスター発表（筆頭演者）を指導した。また International Journal of Hematology の editor (Lead reviewer) として学会誌の編集に参画した。

石川哲也教授は、4月に行われたアジア太平洋肝臓学会主催の APASL Single Topic Conference on Liver Immunology and Genetic に参加し大学院生の口頭発表 “Hepatic intracellular stress responsible for the development of HBV-related fulminant hepatitis” を指導した。また、同学会において口頭発表5題の座長を務めた。

平山正昭准教授は、9月に行われた International Congress of Parkinson's Disease and Movement Disorders にてポスター発表を行った。

川村久美子准教授は、平成25年10月から博士課程教育リーディングプログラム「ウエルビーイング in アジア」実現のための女性リーダー育成プログラムに協力教員として参加している。プログラム内ではアドミッション・リクルートWGに参画し、6リーディング合同プログラムなどの企画運営に携わることで積極的にリクルート活動を行なった。また、プログラムの協力教員として、講義グローバルリーダーにおける講師招聘や海外実地研修の企画を行なうとともに、海外実地研修I(フィリピン)の企画運営に参画した。

田村彰吾助教は、国際血栓止血学会(ISTH2019)に出席し、口頭発表セッションのCo-chairを務めた(セッション: OC28)。また、同学会において2題のポスター発表を行うとともに、所属研究室の大学院生2名の共同演者としてポスター発表を行った(計4演題)。

B) 大学間交流

5月10日(金)に徳島県で第56回国立大学臨床検査技師教育協議会が開催され、全国20校の代表が参加した。本学からは長坂徹郎主任が代表として出席した。会長校である徳島大学の細井英司議長の議事進行で臨床検査技師の育成に関する教育、研究などの諸問題について活発な議論が行われた。5月27日(月)と12月16日(月)には、日本臨床検査学教育協議会の各々定時総会と臨時総会が東京医科歯科大学で開催され長坂徹郎主任が代表として出席し、同協議会の活動状況を把握するとともに、全国の臨床検査技師養成施設の代表と情報交換を行った。

近藤高明教授は、全国多数の大学と研究機関が参加しているがんコホート研究(J-MICC Study)や複数の大学研究者が共同で実施している北海道八雲町調査(毎年8月下旬に実施)に参加している。これらの研究成果の一部は2020年2月に開催された第55回日本循環器病予防学会学術大会で大学院生により発表された。また藤田医科大学医療科学部医療検査学科の藤井亮輔助教ともこれらのコホート研究チームに参加し、ゲノムコホート研究などの分野で共同研究を進めている。9月11日には学生と共にタイのマヒドン大学検査技術学部を訪問し、相互の教育カリキュラムに関する情報交換を行った。9月21日には名古屋大学鶴舞キャンパスで開催された第21回日本看護医療学会学術集会では学術集會長の役割を担い、「次世代型医療の進展は現場をどうかえるのか」をメインテーマに掲げて全国から集まった医療従事者や研究者との学術交流に努めた。

佐藤光夫教授は、2019年4月に名古屋で開催された第116回日本内科学会において演題名「EGFR-TKI治療後の肺腺癌から扁平上皮癌への形質転換の検討 ~afatinibが長期奏効した1自験例と14例のliterature review~」のポスター発表を行った。また、2018年9月には京都で開催された第78回日本癌学会学術総会において演題名「UHRF1はKRAS変異肺癌に対する治療標的としての可能性を持つ」のポスター発表を行った。

石川哲也教授は、国立研究開発法人日本医療研究開発機構研究費「肝炎等克服実用化研究事業(B型肝炎創薬実用化等研究事業)」の2つの研究班「イムノ・オミクス研究を基盤としたB型肝炎に対する治療法の開発」(代表:国立国際医療研究センター肝炎・免疫研究センター 考藤達哉センター長)と「獲得免疫反応の賦活化により核内HBV cDNAを排除する手法の開発」(代表:福井大学学術研究院医学系部門・内科学(2)分野 中本安成教授)に研究分担者として参加し、さらに「実用化に向けたB型肝炎新規治療薬の探索及び最適化」(代表:名古屋市立大学大学院医学研究科病態医科学 田中靖人教授)に研究協力者として参加している。これらの研究班においては、岐阜大学大学院病態情報解析医学 伊藤弘康准教授、熊本大学大学院生命科学研究部消化器内科学 渡邊丈久助教らと研究を行っている。

また、名古屋大学未来社会創造機構ナノライフシステム研究所ナノバイオデバイス・ライフサイエンス・ELSI/EHS 研究部門(所長:工学研究科 馬場嘉信教授)のメンバーを兼任し、病態解析学における研究開発を担当している。

松島充代子講師は川部勤教授とともに呼気中の化学物質の研究に関して、中部大学応用生物学部山本 敦教授らとともに推進してきた共同研究について、公益財団法人科学技術交流財団の度研究会支援事業に平成 28 年に続き平成 30 年度も採択され、2 年間の「ヒト呼気による血中および肺組織の薬物動態解析に関する研究会」を継続している。一連の研究会は松島充代子講師が座長として運営している。また、川部勤教授と松島充代子講師は愛知工業大学工学部手嶋紀雄教授らとともに推進してきた共同研究は基盤研究(B)(研究代表者手嶋紀雄)に採択された「呼気凝集液(EBC)分析法の開発と呼吸器疾患の診断への応用」について新たに共同研究を開始した。一方、呼気の物理量についての研究は広島市立大学情報科学研究科式田光宏教授、長谷川義大先生と共同で(基盤研究(C)研究代表者長谷川義大)研究を推進し、さらに本研究は(株)コスモスウエブも参加し、経済産業省東北経済産業局の「平成 30 年度戦略的基盤技術高度化支援事業」として採択され、産学医工連携共同開発事業として現在展開中である。

早川文彦教授は、日本医療開発機構の革新的がん医療実用化研究事業の研究班「AYA 世代急性リンパ性白血病の小児型治療法および遺伝子パネル診断による層別化治療に関する研究」の代表を務め、白血病の多施設共同臨床研究団体である Japan Adult Leukemia Study Group (JALSG)、名古屋医療センター 安田貴彦 臨床研究事業部・生体情報解析室長などと共同研究を行った。また 10 月に東京で開催された第 81 回日本血液学会学術集会で座長を務め、大学院生 1 名の口頭発表(筆頭演者)を指導した。

平山正昭准教授は、平成 28 年度から革新的先端研究開発支援事業「微生物叢と宿主の相互作用・共生の理解と、それに基づく疾患発症のメカニズム解明」パーキンソン病の起因となる腸管 α -synuclein 異常蓄積に対する腸内細菌叢の関与の解明 代表大野欽司のプロジェクトに参画し、共同研究者の岡山旭東病院柏原健一、岩手医科大学医学部内科学講座・准教授・前田哲也、福岡大学医学部神経内科学・教授・坪井義夫と連携し、臨床部門での検体採取を担当し、国立遺伝学研究所・教授・黒川顕、助教・森宙史と共同で腸内細菌の解析を行っている。愛知学院大学 心身科学部・健康栄養学科・教授・丸山和佳子と唾液中の酸化ストレスマーカーについて共同研究している。これらの研究成果を第 60 回日本神経学会学術大会にてポスター発表し、第 13 回パーキンソン病・運動障害疾患コンgresにおいて大学院生のポスター発表の指導をした。

川村久美子准教授は、10 月に大会長として第 56 回日本細菌学会中部支部総会(名古屋)を

開催するとともに、本学会における修士学生 1 名の口頭発表の指導をした。また 2020 年 2 月に開催された第 31 回日本臨床微生物学会および第 93 回日本細菌学会総会における修士学生 1 名のポスター発表の指導をした。また、藤田医科大学医学部微生物学講座 土井洋平教授と共同研究を行い、日米医学 ARI (急性呼吸器感染症) 部会にて、研究成果を発表した。さらに、藤田医科大学医学部微生物学講座 鈴木匡弘准教授と「肺炎桿菌における新規疫学解析法 PCR-based ORF Typing 法」について共同研究を行っている。

上山純准教授は、令和元年度から名古屋市立大学上島通浩教授とともに基盤研究 A[幼児期に摂取する肥満促進性環境化学物質のカクテル効果に関するコホート研究]をうけ、短半減期化学物質曝露状況の評価法開発に現在取り組んでいる。平成 30 年度革新的先端研究開発支援事業「微生物叢と宿主の相互作用・共生の理解と、それに基づく疾患発症のメカニズム解明」パーキンソン病の起因となる腸管 α -synuclein 異常蓄積に対する腸内細菌叢の関与の解明 代表大野欽司のプロジェクトに参画し、便中短鎖脂肪酸分析を担当している。

田村彰吾助教は 2019 年度日本医療開発機構の「難治性疾患実用化研究事業」特発性血栓症患者のゲノム情報を用いた層別化による病態解明研究の研究協力者としてプロジェクトに参加し、研究代表者の国立循環器病センター辻明宏医師、宮田敏行博士らと共同研究を行った。文部科学省科学研究費助成事業における挑戦的研究(萌芽)では「ゼノフリー型セルフィーダーシステムによる iPS 細胞由来血小板製剤の臨床応用実現」の研究代表者として山梨大学総合研究部の佐々木知幸助教と共同研究を組織し、研究を推進した。

C) 地域との連携

永田浩三教授は、日本循環器学会社員、日本高血圧学会評議員、日本心不全学会評議員、日本内科学会東海支部評議員として学会活動の活性化に尽力した。名古屋大学分子細胞循環器研究会の幹事として循環器疾患の基礎ならびに臨床研究の活性化に尽力した。名古屋大学予防早期医療創成センター教授(兼任)および日本循環器学会東海支部の院内調査に関する派遣医師候補者を務めた。大幸地区産業医として教職員の健康管理に尽力した。名城大学附属高等学校・学校評議員として学校運営および高大接続のために尽力した。医療法人名古屋澄心会名古屋ハートセンター/看護師特定行為研修管理委員会の外部委員を委嘱され、制度の運用に貢献している。

近藤高明教授は、平成 14 年から愛知県犬山での健康まちづくり推進委員会」の委員として地域の健康増進活動に学術専門家として協力してきた。また平成 30 年 7 月からは、長久手市地域保健対策推進協議会およびその成人保健部会委員としての委嘱をうけ、いずれも会長として議事進行と意見の取りまとめに協力してきた。8 月下旬に北海道八雲町で 3 日間

実施された「町民ドック」は多くの大学と町の共同による疫学調査を兼ねた事業であり、スタッフの一員として参加しその成果を町民の保健予防活動に還元するよう努めた。また名古屋大学早期予防医療創成センター教授を兼任し、トヨタ自動車の支援をうけて豊田市とともに立ち上げた「豊田健康ナビゲーター倶楽部」の運営活動に参加した。厚労省が推進している健康保険組合主体の「データヘルス事業」の一つに山田純生教授（理学療法学講座）とともに参加し、企業従業員の健康推進活動を支援した。

石川哲也教授は、日本内科学会東海支部評議員、日本消化器病学会評議員、同東海支部評議員、日本肝臓学会評議員、同西部会評議員として学会活動の活性化に尽力した。肝臓学会では肝臓専門医試験委員会、欧文誌編集委員会の委員とし、消化器病学会では専門医管理システム委員会の委員として活動している。

川部 勤教授は、名古屋大学医師会監事として名古屋大学医師会の運営に貢献した。学会役員としては、日本免疫学会評議員、アレルギー学会代議員、日本呼吸器学会代議員、日本職業・環境アレルギー学会評議員、日本内科学会東海支部評議員、日本呼吸器内視鏡学会中部支部評議員として学会活動の活性化に尽力した。さらに、前年度の最終日の3月31日から4月7日まで開催された第30回医学会総会中部2019の市民展示を展示委員として担当した。松島充代子講師とともに名古屋大学工学研究科西澤典彦教授とOCTによる肺組織の観察システムの開発について共同研究を継続して行った。

川部 勤教授は、令和2年5月に開催される第135回日本結核・非結核性抗酸菌症学会東海地方学会、第117回日本呼吸器学会東海地方学会、第20回日本サルコイドーシス／肉芽腫性疾患学会中部支部会の3学会合地方学会の会長として、佐藤光夫教授、松島充代子講師の協力のもと企画運営を推進した。市民に対する啓発活動としては、令和元年6月に知多市と知多保健所が共催する公害保健福祉事業の呼吸教室の講師、令和元年10月には名古屋市の成人喘息教室の講師、また令和2年2月には名古屋市主催のぜん息講演会で招請講演を行い、令和2年3月には日本アレルギー協会理事、東海支部支部長として同協会東海支部事務局代表の松島充代子講師とともに地域医療への活動、情報提供、啓発活動を行った。さらに藤田医科大学ばんだね病院開催される第26回アレルギー週間事業を支援したが、新型コロナウイルスの影響で中止となった。川部勤教授は東海喘息研究会をはじめとする研究会の世話人として呼吸器・アレルギー疾患の基礎ならびに臨床研究の活性化、啓発活動の推進に尽力し、平成23年より特定非営利活動法人 中日本呼吸器臨床研究機構の監事、また特定非営利活動法人 愛知県 COPD ネットワークの監事として機構の運営に関わっている。また、川部勤教授は名城大学名古屋ドーム前キャンパスの校医として学校保健事業にも参加している。

佐藤光夫教授は、日本内科学会東海支部評議員、呼吸器学会東海支部評議員として、学会

活動の活性化に尽力した。

早川文彦教授は、日本内科学会東海支部評議員、日本血液学会社員、同東海支部評議員として学会活動の活性化に尽力した。また日本血液学会ガイドライン委員としてガイドライン作成を行なった。

平山正昭准教授は、名古屋大学予防早期医療創成センター准教授（兼任）としている。全国学会として、日本神経学会、日本自律神経学会、日本末梢神経学会の評議委員を行っている。地域ボランティアとして、日本パーキンソン病友の会愛知県支部の顧問を務め、年4回の地域講演活動、友の会会員旅行、2ヶ月に1回の会報の執筆を継続して行っている。患者団体が主催する日本パーキンソン病コンGRESの開催の運営に参加している。

川村久美子准教授は、名古屋大学予防早期医療創成センター准教授（兼任）として参画しており、産学官の連携および融合研究の発展に尽力した。また、日本臨床微生物学会および日本細菌学会中部支部会の評議員として学会活動の活性化に尽力した。

上山純准教授は、環境省化学物質の人へのばく露量モニタリング調査に関するタスクフォース委員として、事業の設計等について議論した。愛知県衛生研究所運営委員会委員として、調査研究、試験検査等について審議した。日本衛生学会評議員と日本医用マススペクトル学会評議員として学会運営に協力した。日本産業性学会の許容濃度委員会にて臨時起案委員として招集され、農薬の許容濃度に関する取りまとめに尽力した。名古屋第二赤十字病院における治験審査委員会にて、外部委員として審議に参加した。愛知県ペストコントロール協会の特殊健康診断に殺虫剤ばく露評価を採用し、その尿中殺虫剤代謝物分析の実施に貢献した。環境省エコチル調査曝露評価専門委員会精度管理分科会委員として招集され、精度管理に関する議論を行った。

橋本克訓助教は、愛知県臨床検査技師会・病理細胞検査研究班の副班長として活動し、病理・細胞検査部門に従事する臨床検査技師の卒後教育に尽力した。令和元年7月7日に開催された第19回愛知県医学検査学会では病理・細胞検査部門の演題発表の座長を務めた。9月15日には同研究班主催の基礎講座（テーマ：子宮がん Up to date）を大幸キャンパスで開催し、実務委員を務めた。また、同会において平成26年度より病理検査部門の精度管理を担当しており、平成31年（令和元年）度はフォトサーベイを実施するにあたり実務委員を務め、病理検査部門の精度向上に貢献した。令和2年2月15日には同会の研究会で「卒前教育における臨地実習について」というテーマの講演を行い、臨地実習の変遷や日本臨床衛生検査技師会と日本臨床検査学教育協議会が答申した「臨床検査技師教育の見直しについて」に関して、特に今後の臨地実習のあり方について病理検査部門の臨床検査技師向けに

概説した。また、日本臨床検査学教育協議会病理組織細胞学分科会では幹事を務め、令和元年 8 月 22 日に第 14 回日本臨床検査学教育学会学術大会の会期中に行われた分科会の検討事項の基礎資料となる 2019 年度病理組織・細胞診標本の顕微鏡実習のアンケートの作成に携わり、臨床検査技師養成校における病理組織細胞学の顕微鏡実習の実態を明らかにし、各校の病理組織細胞学の担当教員間の情報交換、情報共有に寄与した。

田村彰吾助教は、日本血栓止血学会の評議員として学会運営に協力し、学会の活性化に尽力した。

(主任：佐藤 光夫)

リハビリテーション療法学専攻 理学療法学講座・理学療法学専攻

(平成 31 年度及び令和元年度)

理学療法学は、身体組織および機能の低下、あるいは能力の制限を持ちながらも、質の高い人生を送るために不可欠な医療に関する研究推進ならびに高度専門教育を行う。そのために、機能不全の原因となる病態や発生機序を生理学的に解明する基礎研究とともに、機能・能力の効果的回復や機能維持、更には疾病・障害の再発予防に関する臨床研究を積極的に推進し、質の高い理学療法の基盤を創造する。

また、学内他専攻はもとより、他大学ならびに海外の学術・研究チームと積極的に交流し、国際的水準で研究推進ならびに後進の指導を行い得る人材の育成に努めるものである。

1. 運営

本専攻は、2012 年度から大学院の重点化に伴い、リハビリテーション療法学専攻理学療法学講座として組織されている。運営は、全教員（総数 9 名）による講座会議（毎週水曜日 12 時から開催）における協議・決定にしたがい進められている。さらに、同じ専攻である作業療法学講座と合同の大学院会議（毎月第 1, 3 水曜日）を行っている。

2. 教育活動

学生については、学部においては理学療法学専攻の名称が用いられる。大学院博士前期課程では理学療学分野、大学院博士後期課程はリハビリテーション療法学専攻が理学療法学領域と作業療法学領域を併せて一講座としているため、便宜上、理学療法学関係と記述している。

○令和元年度の具体的活動内容

学部生としては、4 月に保健学科理学療法学専攻第 22 期生として 21 名の学部学生を迎え入れた。性別は男子学生 14 名、女子学生 7 名であった。選抜方法による内訳は、推薦入学 8 名、前期日程試験入学 13 名、私費外国人入学 1 名であった。大学院には、前期課程に 9 名（一般選抜 5 名）、後期課程 4 名（一般選抜 2 名）が入学した。こうして、理学療法学専攻としての学生数は、1 年生 21 名、2 年生 21 名、3 年生 18 名、4 年生 28 名、大学院博士前期課程リハビリテーション療法学専攻理学療学分野の 1 年生 9 名（一般選抜 5 名）、2 年生

10名(一般選抜8名)、後期課程のリハビリテーション療法学専攻理学療法学分野は1年生4名(一般選抜2名)、2年生2名(一般選抜0名)、3年生4名(一般選抜1名)となった。

新学期には4月3日(水)午前中に新入生に対する全体ガイダンス、午後からは作業療法学専攻とともに新入生に対する教務および学生生活ガイダンスを行った。ここでは作業療法学専攻と共同で、全教員との顔合わせも行った。4月8日(月)には新大学院生を対象とした全体ガイダンス、情報関係ガイダンスに続いて、リハビリテーション療法学専攻によるガイダンス、在校生ボランティアからの説明等があった。4月5日(金)午前中に入学式が行われた。4月5日(金)には2-4年生を対象とした在校生ガイダンスを行なった。この在校生ガイダンスでは、共通科目については理学療法学・作業療法学両専攻合同で、専門科目については理学療法学専攻単独で、各学年別に1時間ずつを使い、本年度のカリキュラムの説明、学生生活のルールの再確認を行った。これらにより、本専攻に所属する学部学生、大学院生のすべてに対して、カリキュラムの説明、学生生活のルールの説明・再確認がおこなわれた。説明は主任、教育・FD委員、学生生活委員、授業担当教員が担当した。

4月10日(水)には、専攻内での新入生歓迎会を行った。新2年生が幹事となり、在校生、新入生、教員が参加し、全員の自己紹介、懇親会を通じて人間的交流・連携の強化を達成した。

4月中旬から臨床実習Ⅱ、Ⅲが始まる4年生に対し、各教員が臨床実習に必要な項目についての学内実習をおこない、4月22日(月)から実際の医療機関での臨床実習が始まった。この実習は各種疾患を観察し、臨床実習指導者のもとに基本的評価および理学療法プログラムの作成を目的としている。学生は多くの不安を抱きながら、実習先に向かったが、5週ごとの反省会で、種々の問題点などが指摘されながらも、この実習を終えることが出来た。6年前から開始した臨床実習前の学内実習もあって、各学生とも実りの多い臨床実習を経験できたものと思われた。臨床実習は7月5日(金)に終了した。4年生は7月8日(月)に臨床実習反省会を行ない、7月10日(水)に理学療法セミナーⅡの一部として、実習で担当した患者様の症例報告会を行なった。理学療法セミナーⅡはさらに吸引療法の理論と実際について、非常勤講師とともに看護学専攻教員、理学療法専攻教員らがそれぞれ担当して行った。

また、4年生を対象として地域理学療法学実習が7月16日(火)～23日(火)の期間、3つのグループに分かれて行われた。地域理学療法学実習は、デイサービスおよび訪問理学療法の実際を見学できる貴重な実習である。

夏季の集中実習として8月6日～8月7日の2日間、病態人体解剖実習が行われた。これ

には医学部主催の人体解剖トレーニングセミナーで解剖されたご遺体が提供された。学生にとっては人体構造と機能の理解を深めるとともに、ご遺体に対する感謝の念を通して人の命の尊厳を考え、将来の医療人としてのあり方を考えるよい機会となった。

平成 30 年度大学院博士前期課程入学試験は 8 月 28 日（水）、同後期課程入試は 8 月 29 日（木）にそれぞれ実施し、リハビリテーション療法学専攻博士前期課程理学療法学分野に 14 名（一般選抜 14 名）、博士後期課程理学療法学講座に 4 名（一般選抜 3 名、社会人特別選抜 1 名）が合格した。

9 月 25 日（水）には博士後期課程の論文発表会（予備審査会）が本館第 5 講義室で行われ、理学療法学講座からは 4 名の学生が発表した。

第 11 回目となる韓国延世大学との学術交流会が企画され、名古屋大学理学療法学専攻の大学院生 2 名を開催地である本学原州キャンパスに派遣し、10 月 31 日（木）から 11 月 7 日（木）にかけて学術交流、学術研修を通じて親睦を深めることができた。また、11 月 13 日（水）から 20 日（水）にかけて、韓国延世大学の大学院生 2 名を大幸キャンパスに受け入れて、学術研修や国際交流を図る機会をもった。

秋学期授業では 4 年生の卒業研究の後半部分が再開され、11 月 27 日（水）に本館第 2 講義室において最終発表会が開催された。22 題の発表があり、教員ならびに在学生との活発な討論が交わされた。1、2 年生にとっては将来の自身の研究の参考になったと思われる。また、3 年生の卒業研究中間発表会は令和 2 年 1 月 31 日（金）に本館第 2 講義室で行われた。合計 20 題の発表があり、学生からの質問も多く、活発な発表会となった。

大学院では、9 月 25 日（水）に博士後期課程 3 年生 3 名を対象に、本館第 5 講義室で予備審査会を開催した。また、平成 31 年 2 月 20 日（木）に作業療法学専攻を含むリハビリテーション療法学専攻理学療法分野（博士前期課程）17 期生の修士論文ならびに博士後期課程博士論文発表会が行われ、理学療法分野から前期課程 9 題、後期課程 1 題、合計 10 題の発表があった。博士前期課程修了者は 9 名で、病院就職 3 名、一般企業への就職 3 名、公益社団法人への就職 1 名、博士後期課程進学者 2 名であった。博士後期課程については 2 名が学位を修得した（1 名が短縮修了）。3 月 11 日（水）には前期課程 1 年生（18 期生）の中間報告会が行われ、理学療法分野から 9 題の発表があった。

2 月 29 日（日）には理学療法士国家試験が施行され、本専攻学部令和元年度卒業生 22 名が受験した。3 月 25 日（水）には保健学科第 19 期生の卒業式が執り行われた。本専攻は編入学生を含め 22 名の新卒業者を世に送り出した。そのうち 7 名が病院に就職し、10 名が大

学院へ進学した。

2月14日(木)には平成31年度大学院入学者のための大学院説明会が開催された。

3. 研究活動

各教員の研究テーマは、以下のとおりである。

山田 純生 教授：

デジタルヘルスによる虚血性心疾患の重症化予防
健保組合員を対象とするリスク因子の重症化予防
電気刺激を併用した骨格筋機能改善

内山 靖 教授：

姿勢・運動の制御と運動学習に関する研究
症候障害学
理学療法学教育に関する実践的研究

亀高 諭 教授：

筋芽細胞の膜融合過程の調節機構
遺伝性痙性対麻痺の原因遺伝子群（SPG 遺伝子群）の機能解析
がん悪液質性筋萎縮に対するリハビリテーションの分子科学的検討
筋損傷からの治癒過程を促進する分子の探索

杉浦 英志 教授：

がん悪液質による二次性サルコペニアの疫学的研究
小児運動器疾患の予防的介入研究
ロコモ・フレイル・サルコペニアのレジストリ研究

李 佐知子 准教授：

脳血管障害後の痙性発症メカニズムの研究
大脳皮質損傷 後の運動機能回復メカニズムの研究

松井 佑介 准教授：

生命科学、医科学および健康科学を対象としたデータサイエンス手法、ソフトウェア開発

およびデータ解析

疾患特異的な分子メカニズムの理解と分子標的の同定を目的とした大規模オミックスデータ解析手法の開発

ヘルスケアに関わるセンシングデータに対する解析手法の開発

井上 倫恵 助教：

骨盤底機能障害に対するリハビリテーションに関する研究

産後の女性におけるマイナートラブルに関する研究

長谷川隆史 助教：

不全脊髄損傷者の歩行再建に関する研究

再生医療を念頭に置いた完全脊髄損傷者の装具歩行トレーニングの再考

足立拓史 助教：

心血管疾患の発症・重症化予防

フレイル/サルコペニアに関する臨床疫学研究

4. 対外的な、または社会と関わりのある活動

臨床実習指導者連絡協議会（スーパーバイザー会議）が7月31日（水）に行われた。内容は、臨床実習全般（理学療法イントロダクション、同コミュニケーション、臨床実習Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ）についての報告と反省、臨床実習前の学内実習である基本的臨床技能実習試験（OSCE）の実際とその学習効果、さらに臨床実習Ⅱ、Ⅲについて本学の理念や目的と実習施設における実習目的との差などについて協議した。更に、秋学期より始まる臨床実習Ⅰ、理学療法コミュニケーション、同イントロダクションについて協議した。

専攻代表が出席した学外関係会議は、第21回国立大学理学療法士・作業療法士教育施設協議会（9月13日（木）～14（金）、担当：秋田大学）であった。

毎年夏に催される名古屋大学・大学説明会（オープンキャンパス）は8月9日（金）に行われた。保健学科は大幸キャンパスを主会場とし、参加した高校生に保健学科全体の説明がなされた後、各専攻に分かれ、本専攻の特徴などについて山田教授、杉浦教授が説明した。本専攻の説明会には約200名が参加し、教員と学生が施設を案内し、質問に答えた。質問も多く、高校生の興味の深さがうかがわれた。

10月29日（火）には地震防災訓練が行われ、保健学科全体で、教職員、学生が多数参加した。

（主任：亀高 諭）

リハビリテーション療法学専攻 作業療法学講座・作業療法学専攻

(平成 31 年度及び令和元年度)

本学作業療法学講座および作業療法学専攻(以下 本講座)は、作業療法学が探求する人間の体や病気の知識を基本に、人間の生活を科学的に分析し、障害がある人への支援に応用する学問構築に努めている。また、我が国の作業療法学の半世紀を超える実践での蓄積は、様々な作業活動を介し、社会生活を制限する障害を改善・軽減することや生活環境の調整によって、障害を持つ人々のその人らしい社会生活を営むための支援や援助により、個々の社会的ニーズに即応して高い保健・医療・福祉の領域に貢献している。

昭和 59 年 4 月(1984 年)に本学に開設された先の名古屋大学医療技術短期大学部・理学療学科及び作業療学科は、平成 14 (2002) 年 4 月には名古屋大学大学院医学研究科を医学系研究科に改称し、医学系研究科に修士課程看護学専攻、医療技術学専攻及びリハビリテーション療法学専攻が設置された。また、平成 16 年 4 月 (2004 年) 博士課程(後期課程)が設置され医学系研究科修士課程看護学専攻、医療技術学専攻及びリハビリテーション療法学専攻は博士課程(前期課程・後期課程)となった。

今日に至るまで、本講座はリハビリテーション医療における学問体系の確立と高度専門職業人の育成、および教育者、研究者の育成を主眼に歩みを続けている。また作業療法士専門職教員と医系教員より構成され、各教員の専門領域を活かした教育・研究活動を通して作業療法学の発展に向けて鋭意努力している。作業療法学における脳神経機能とヒトの認知と行動の関係、新たな支援技術の提案・開発、激変する超高齢化や少子化に伴う国内社会構造の多様化に密着した臨床研究など、国内外の先進的な作業療法学の専門性を探求してきた。

学部 4 年教育では研究法を学んだ卒業研究や短期海外研修を通じ、高度な専門性と国際性を身につけた作業療法士の育成を積極的に推進している。また、令和 2 (2020) 年に施行となる理学療法士作業療法士学校養成施設指定規則の改正に即応し、臨床実習と学部教育内容の事前検討と再考を迅速に進めてきている。大学院教育では、リハビリテーション医学や作業療法学領域での科学技術や研究開発の発展に国際的に寄与できる研究者と高度専門職業人の育成を目指し、学生教員が一体となってその拡充に努めている。

博士前期課程では、保健学という幅広く学際的な視点をベースとし、より専門性の高い作業療法学の習得を主眼としている。学問の拡充に欠くことの出来ない EBM (Evidence Based Medicine : 根拠に基づく医療) の発展のため、臨床領域で研究を継続するための研究技術の習得や、保健学の基礎となる医療管理学や福祉学、作業療法の高い技術習得を目的としたリハビリテーション臨床実践実習など、研究と臨床的活動の両者を踏まえた教育・研究活動を推進している。また博士後期課程では、前期課程から引き続き研究に従事し、その成果を発信し発展することのできる国際的な研究職の育成を目指し、多彩な研究活動を推進している。これまでの多くの修了生は国内外で研究活動を継続し、次世代を育成する役割を担っ

で活躍している。今年度は令和2年度に行われる予定の大学院改組のため、保健学科すべての専攻において活発な討議が行われたことを付記しておく。

1. 講座運営

平成31年度の本講座は、飯高哲也教授（主任・脳とこころの研究センター併任）ほか3名の教授（辛島千恵子、千島亮、寶珠山稔）、准教授2名（伊藤恵美、上村純一）、講師1名（星野藍子）、助教1名（五十嵐剛）の計8名の専任教員により運営を始めた。寶珠山教授は同年4月1日より、保健学統括専攻長・保健学科長に就任した。また4月1日から新たに助教として吉田彬人（あきひと）が着任し、合計で専任教員数は9名となった。4月末日をもって長年にわたり当講座を牽引されてきた伊藤恵美准教授が、関西医療大学・保健医療学部・作業療法学科へ教授としてご栄転された。これにより令和元年度の作業療法学講座専任教員数は8名となった。

本講座の年度運営は、全教員が参加する専攻会議（毎週水曜日開催）によって学部教育および研究活動の具体的な年次進行に沿った活動方針を決定している。本会議では、学生の教育に関する事案（成績関連、単位認定、進級関連、国家試験関連、卒後進路など）、学部学生生活に関する事案、短期・長期の臨床実習に関する事案（実習計画、臨床実習施設との連携および実習施設指導者会議運営など）、本学の学年歴および保健学科の諸行事に合わせた年間行事、事業についての計画とその進行状況、年度専攻予算に関する事案、その他保健学科全体の諸課題について講座としての方針や考え方を討議決定している。特に個々の学生への指導など、具体的な教育課題について詳細な検討や課題解決への方策を合議により決定している。また人事など教授専任事項については、随時講座教授会議にて審議している。本会議は構成メンバー全員の意見の一致を原則として運営されている。

リハビリテーション療法学専攻で密な連携関係にある理学療法学講座と共に毎月両講座会議（毎週第1・第3水曜日開催）を設け、両講座の全教員が参加して共通する課題検討に取り組み、連携・協力を図っている。大学院運営の機構としては両講座同席によるリハビリテーション療法学専攻会議を月に1回の定例で開いている。

2. 平成31年・令和元年度大学院、学部の教育活動

作業療法学専攻の平成31年度入学学部学生は22名であった。選抜方法による内訳は、推薦入試で入学した学生は3名、前期日程試験で入学した学生は19名。性別では男子学生6名、女子学生16名であった。

平成31年度の大学院博士課程前期課程作業療法学講座には8名。性別では男子学生2名、

女子学生 6 名が入学した。一般選抜による入学生は 8 名で社会人特別選抜による入学生は 0 名であり、8 名とも内部卒業生であった。また、平成 31 年度入試の博士課程後期課程作業療法学講座には 1 名。女子学生 1 名が一般選抜により入学した。

1) 学部新入生のガイダンスを 4 月 3 日（水）に、大学院新入生のガイダンスを 4 月 8 日（月）にそれぞれ実施した。毎年度始めには新入生および編入生のみならず在校生各学年別に年度当初ガイダンスを実施し、当該年度における教育内容、学生生活に関する説明と確認を行っている。本年度は特に大学生生活上の安全衛生に関する諸注意を中心として、大学生として守るべき個人情報に関する注意事項など、情報化社会に対応した諸注意を中心に実施した。大学における学修と生活の基本的内容については、作業療法学講座および理学療法学講座と合同で行い、個別の内容について講座別にガイダンスを行った。この時期、作業療法学専攻 4 年生については臨床実習が既に始まっているため、ガイダンスは前年度末までに実施することとしている。

2) 平成 31 年 4 月 13 日（土）・14 日（日）：通称「犬山ガイダンス」は、一泊二日の日程で行われる学部新入学生・在校生合同（臨床実習に参加している学部 4 年生を除く）の年度当初ガイダンスである。昨年同様に愛知県犬山市犬山国際ユースホステルで開催された。全教員、新入生、新 2 年生、新 3 年生が集合し、教員紹介・学生紹介の後、専攻ガイダンスを実施した。

新入の学部学生が円滑に快適で充実した学生生活を送るという目的で開催され、全教員や 2 年生 3 年生からの公私による示唆や助言などを通して実施された。夕食後新 2 年生を中心とした親睦会が行われた。同時に学年相互の交流・親睦を目的として種々のイベントを開催した。新 2 年生が編纂する小冊子が配布され、作業療法学専攻に関わる教員と学生間での親睦に活用された。本ガイダンスについては、今後の開催時期や方法について議論を進めており、実施継続に関する再検討を専攻内で協議を進めている。

3) 平成 31 年 4 月 1 日（月）から 8 月 8 日（木）：4 年生臨床実習の実施。学部 4 年生を対象とし最終年次前期期間中、学内外の臨床施設（名古屋大学医学部附属病院を含め 49 施設）にて臨床実習を行った。実習期間を 3 期に分け、臨床実習Ⅰ（身体障害分野）、臨床実習Ⅱ（精神障害分野）、臨床実習Ⅲ（発達障害分野および老年期障害分野）の医療機関・施設で臨床実習を行なった。Ⅰ期：4 月 1 日（月）から 5 月 10 日（金）に実施。Ⅱ期：5 月 20 日（月）から 6 月 28 日（金）に実施。Ⅲ期：7 月 1 日（月）から 8 月 8 日（木）に実施。

4 年生の学外臨床実習に際しては、各施設に担当教員を事前に配置し、学生の学修状況や体調、実習の進捗状況を把握するように努めている。個々の学生の実習進捗状況はメールおよび毎週の会議で報告され、問題の生じた事項については全教員で審議して指導対応した。指導教員、実習担当教員、施設担当教員、実習担当教員が各対応を進めた。

- 4) 令和元年 5 月 18 日 (土) : 大学院説明会を開催し、一般学生と社会人学生多数の参加があった。
- 5) 令和元年 7 月 3 日 (水) : 大学院博士後期課程 2 年次中間発表会。リハビリテーション療法学専攻理学療法学講座 2 年生に在籍する大学院生 2 名が研究テーマについての進捗状況を報告した。研究発表会では今後の研究方針について教員から助言・指導を受けた。
- 6) 令和元年 8 月 9 日 (金) : 大幸キャンパス・オープンキャンパス開催。本キャンパスにおいて、保健学科全体では大学教育理念、大学院、アドミッションポリシーなどを、専攻別説明会では学内の作業療法学専攻関連施設を小グループに分割してツアー形式での説明会を実施した。説明会参加者に対して講義室や実習室等を案内し、本学における本専攻の教育理念、方針、具体的教育内容について教員より説明した。午前 56 名 (昨年 33 名)、午後 28 名 (昨年 34 名) の参加があった。保健学科全体では総参加者 892 (昨年 864 名) であり、愛知県・岐阜県・静岡県からの参加者が多くを占めた。本年度も保護者からの参加希望があった。
- 7) 令和元年 8 月 28 日 (水) : 大学院博士課程前期課程入学試験。
- 8) 令和元年 8 月 29 日 (木) : 大学院博士課程後期課程入学試験。
- 9) 令和元年 9 月 12 日 (木) : 卒業研究中間発表会 (学部 4 年生 15 名)。卒業研究の途中経過の報告と教員による助言・指導があった。
- 10) 令和元年 9 月 25 日 (水) : 博士後期課程予備審査会を行った。両専攻からそれぞれ 3 名の発表者があり、途中経過の報告と教員による助言・指導があった。
- 11) 令和元年 9 月 17 日 (火) ~25 日 (水) : 作業療法入門実習 (学部 1 年生 22 名、2 年生 1 名)。本専攻入学後の最初の臨床実習となる。作業療法における主要な分野 (身体障害分野、精神障害分野、発達障害分野、老年期障害分野) の関連の機関・施設 6 ヶ所の見学を中心とした実習を実施した。終了後、教員が同席してのセミナーを実施した。
- 12) 令和元年 9 月 17 日 (火) ~12 月 4 日 (水) : 作業療法基礎学実習 (学部 2 年生 18 名、3 年生 1 名)。作業療法の対象となる施設や対象者を理解する目的で 2 年生後期に実施している。学生は、身体障害分野、精神障害分野、発達障害分野及び老年期分野の 4 領域の医療機関・施設のうち 3 か所で基礎額実習を実施した。学生 1 人あたり 1 か所の実習は 3 日間

とした。12月11日（水）に精神障害分野5施設、身体障害分野4施設について領域ごとに担当教員が同席してのセミナーを実施した。

13) 令和元年12月12日（木）：卒業研究発表会（学部4年生18名）。卒業研究の最終発表会であり、続いて論文の編集・作成が行われた、本研究発表会の内容は「名古屋大学医学部保健学科作業療法学専攻・卒業研究論文集・第19巻」として発刊した。

14) 令和2年度大学入試センター試験：1月18日（土）と19日（日）の両日に実施。

15) 令和2年2月10日（月）：学部推薦入学試験の実施。

16) 令和2年2月20日（木）：リハビリテーション療法学大学院博士課程前期課程および後期課程学位論文発表会を実施した。作業療法学講座からは博士前期課程5名、博士後期課程1名の発表を行なった。

17) 令和2年2月13日（木）：臨床実習指導者会議を開催した。4年次に行われる臨床実習での実習協力施設の実習指導者を招いて、臨床実習指導者会議を開催した。次年度の実習展開について、当専攻で検討してきた従前からの臨床実習展開で課題となってきた学生負担軽減と指導教員の訪問指導負担の効率的な軽減に向けた再検討を行ってきた。次年度からの臨床実習指導の変更内容について臨床実習教授より説明した。

同講演はビデオ撮影し、当該専攻ホームページにおいて、本専攻での臨床実習内容の変更点を各依頼施設において閲覧できるようアップロードして臨床実習指導についての専用ページを開設した。次年度からの実施にあたっては各期実施において、本学内指導の日を設け、学生と教員間で報告・検討会を実施することとした。学生から要望がある場合には施設担当教員との面談指導を可能とした。

学生の課題としては、各期の学内指導日の一週間前までに施設担当教員にメールにて実習の進捗状況、その時点での改善課題、対応が必要な問題点などを報告することとした。施設担当教員は以上の内容を学生との間で状況把握すると同時に指導を進める。また、施設担当教員は事前に施設において希望した訪問対応、電話対応、メール対応などの方法で、実習施設の指導者との間で学生の実習状況の把握に努め、調整及び指導を迅速に進められるものとした。また会議では定例報告として、令和元年度臨床実習結果を報告した。大学からの各臨床実習の到達目標設定と学生評価、長期の臨床実習に発展させる上での基礎学実習の重要性と進め方を再度説明し、一昨年より実施している学内指導日を設けた実習計画変更内容を再度説明した。

18) 令和2年2月23日（日）第55回理学療法士作業療法士国家試験。本専攻から卒業予定

者 16 名、既卒者 1 名の合計 17 名が受験した。

19) 令和 2 年度個別学力検査（前期日程）：2 月 25 日（火）と 26 日（水）に実施

20) 令和 2 年 3 月 2 日（月）：OSCE（客観的臨床能力試験）「臨床応用学実習」を学部 3 年生（20 名）を対象に実施した。

21) 令和 2 年 3 月 11 日（水）：博士課程前期課程中間発表会を開催した。新型コロナウイルス感染防止のため、理学療法学専攻と作業療法学専攻はそれぞれ別個に行った。作業療法学講座前期課程 1 年在籍の 8 名が研究の進捗状況を報告した。

22) 令和 2 年 3 月 23 日（月）：理学療法士作業療法士国家試験合格発表。本専攻では受験した 17 名全員が合格であった。

23) 令和 2 年 3 月 25 日（水）：新型コロナウイルス感染防止のため学部および大学院卒業式は中止となり、学位授与式を各研究室単位で行った。本年度は学部学生 17 名（男性 4 名、女性 13 名）が卒業した。大学院リハビリテーション療法学専攻作業療法学講座では修士号 5 名（男性）、博士号 1 名（男性）の取得があった。

3. 国際交流

令和元年 10 月 31 日（木）から 11 月 7 日（木）の期間、令和元年度名古屋-延世大学学術研究交流事業として韓国の延世大学大学院作業療法学講座を本専攻修士大学院生 2 名が訪問。11 月 1 日（金）には英語発表による研究会を開催し、質疑応答、意見交換を含めて大学間交流を図った。その後の期間は関連施設見学と延世大学保健学科教員の研究室訪問を行い、積極的な意見交換を行った。また令和 2 年 1 月 27 日（月）から 2 月 3 日（月）まで名古屋-延世大学学術研究交流事業として、本学に延世大学大学院作業療法学専攻から大学院生 2 名（博士後期課程：1 名、同前期課程：1 名）が訪問。名古屋市内を中心とする日本の医療施設や学内の研究室などを訪問し、本専攻の教員、大学院生と共に積極的な意見交換を行った。

4. 研究活動

本講座では作業療法各分野および基礎的研究各分野における研究が大学院教育とともに

行われている。研究は教員による個人研究が中心であるが、企業や他施設との共同研究も積極的に推進している。今後の大学院教育の拡充を念頭に置いた改組計画が推されており、次年度計画を加味した今後の本学大学院教育の検討を進めた。

4-1 個人研究

- 1) 自閉症スペクトラム児の情動的コミュニケーションを基盤とした作業療法の効果（辛島）
- 2) 特別支援教育・作業療法士と教員のための環境因子観察表の開発（辛島）
- 3) 発達障害・他がある子どもと養育者の地域包括ケアに生かす外出に関する質問紙の開発（辛島）
- 4) 社会脳に関する fMRI 研究（飯高）
- 5) 扁桃体と顔認知の脳画像研究（飯高）
- 6) 安静時 fMRI を用いた精神疾患の補助的診断方法の開発（飯高）
- 7) 精神疾患の脳画像研究（飯高）
- 8) 運動と体性感覚誘発脳反応に関する研究（寶珠山）
- 9) 安静時と課題時の脳磁図による脳活動解析（寶珠山）
- 10) 重度神経疾患患者（児）の生活支援に向けた新たな支援技術開発（千島）
- 11) 脳波応用による生活支援技術の研究（Brain-Computer Interface 研究）（千島）
- 12) ヒトの運動情報処理機構と運動障害に関わる基礎的研究（千島）
- 13) 体性感覚弁別課題による脳機能変化に関する研究（上村）
- 14) 固有感覚イメージ課題による関連皮質領域ならびに皮質間連絡の賦活に関する研究（上村）
- 15) 高齢者の参加に関する評価法の信頼性妥当性についての研究（上村）
- 16) 重度精神障害者の地域生活支援に関する研究（星野）
- 17) うつ病患者の育児支援・就労に関する研究（星野）
- 18) 摂食障害患者の治療展開に伴う主観的評価に関する研究（星野）
- 19) 認知課題と子供の座位姿勢に関する研究（五十嵐）
- 20) 地域で生活する子どもの活動・参加に関する研究（五十嵐）
- 21) 慢性疼痛患者の大脳皮質活動に関する研究（吉田）

4-2 共同研究

- 1) 厚生労働省難治性疾患克服事業（スモン患者の QOL に関する研究：寶珠山・上村・星野）
- 2) 厚生労働省科学研究事業（複合性局所疼痛症候群の評価に関する研究）（寶珠山）

- 3) 日本語入力 BCI システムの臨床応用の研究 (工学研究科) (寶珠山)
- 4) てんかん患者における脳磁図及び脳画像解析 (医学系研究科・小児科、脳神経外科) (寶珠山)
- 5) 手の外科領域における感覚障害と疼痛緩和効果に関する研究 (医学系研究科・手の外科、リハビリテーション部) (寶珠山)
- 6) 革新的技術による脳機能ネットワークの全容解明プロジェクト (医学系研究科、精神医学) (飯高)
- 7) 相互主体性の解析に基づく社会行動の神経基盤と発達過程の解明 (生理学研究所) (飯高)
- 8) 脳内電極脳波によるヒトの高次脳機能研究 (医学系研究科、脳神経外科) (飯高)
- 9) 摂食障害患者に対するリハビリテーションの開発とその効果検証に関する研究 (医学系研究科精神医学・医学部附属病院リハビリテーション部) (星野)
- 10) うつ病患者に対するリハビリテーションの開発 (メンタルクリニックアンセル) (星野)
- 11) 統合失調症患者の時間使用に関する研究 (東京家政大学・中部大学・日本福祉大学・医学部附属病院リハビリテーション部・北勢病院・心療センターひなが・共和病院・北津島病院・榊原病院) (星野)
- 12) 熱傷成人患者のハンドセラピー効果の検証 (Hong Kong Polytechnic University、手の外科) (吉田)
- 13) 脊髄小脳変性症患者に対するロボットリハビリテーション効果の検証 (神経内科) (吉田)
- 14) 脳腫瘍患者の復職支援に関するリハビリテーション効果の検証 (脳神経外科、医学部附属病院リハビリテーション科、医学部附属病院リハビリテーション部) (吉田)

(主任：飯高 哲也)

脳とこころの研究とその社会的応用

・名古屋大学大学院医学系研究科 ・名古屋大学医学部保健学科

本学は昭和58年以来、大学での研究成果や知的財産を地域の皆様に還元することを目的として、健康や医療に関わるテーマで一般市民の皆様を対象とした公開講座を開催してまいりました。

本年は、「脳とこころの研究とその社会的応用」と題して2つの講演を行います。研究に関心のある方、最新の知見を勉強(収集)したい方、研究者をめざしている方など皆様のご来場をお待ちしております。

受講料
無料

2019.10.19 sat
10:00-11:50

名古屋大学大幸キャンパス
東館4階大講義室

[定員] 100名 事前の申し込みが必要です。
先着順に受け付けます。

講座内容

第1講演 10:00-10:50 ヒト脳研究の昔と今

内容 古くから人はこころの働きが、どのようなメカニズムにより成り立っているかに興味がありました。そして様々な手法を用いて、脳の機能を調べようと実験を進めてきました。脳は頭蓋骨におおわれており、なかなかその神秘的な姿を人類に見せることはありませんでした。しかし21世紀に入り科学の力により、その一端が明らかになってきています。本日はその一部を紹介したいと思います。

名古屋大学大学院医学系研究科 作業療法学講座・教授 飯高哲也

第2講演 11:00-11:50 医療・介護領域に導入されるロボット技術応用の新しい流れ

内容 2014年に国際規格ISO 13482「ロボット及びロボティックデバイス：生活支援ロボットの安全要求事項」によって、開発・普及・活用の安全基準が国際標準化機構(ISO)により全世界に向け示されました。従来までの工業・医療中心のロボット技術応用だけでなく、超高齢化が進む我が国においても家族の介護負担の軽減など、私たちの身近な生活の中で活用できる時代となりました。演者の生活支援技術の研究テーマと共に概観したいと思います。

名古屋大学大学院医学系研究科 作業療法学講座・教授 千島 亮

お申し込み方法

- ▶ はがき、ファクス、または電子メールのいずれかでお申し込みください。
- ▶ お申し込みには、【市民公開講座申し込み】と明記のうえ、氏名(フリガナ)及び連絡先を必ず記入してください。
※電子メールの場合、表題を【市民公開講座申し込み】としてください。
- ▶ 締め切り: 10月4日(金) 到着分
※受講可能な場合、お申し込みへの返信はいたしません。

お申し込み先

〒461-8673 名古屋市東区大幸南1-1-20
名古屋大学大学院医学系研究科(保健学)教務学生係
Fax: 052-719-1506
E-mail: ihogakumu@adm.nagoya-u.ac.jp(申込み専用)

その他

受講申込時に記載された個人情報等は、本公開講座の運営のみに利用させていただきます。また名古屋市に暴風警報が発令され、午前8時までに解除されない場合や災害や感染症の流行等が生じた場合には、ホームカミングディ、公開講座は中止とさせていただきます。その際は、本学ホームページ(<http://www.nagoya-u.ac.jp/>)上でお知らせしますので、開講前は特にご注意願います。

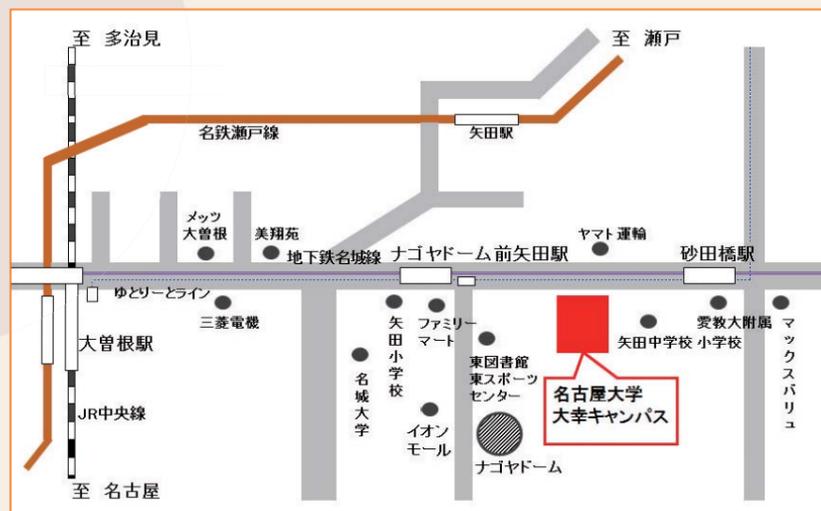
後援

愛知県看護協会、愛知県診療放射線技師会、愛知県臨床検査技師会、愛知県理学療法士会、愛知県作業療法士会

会場への交通案内

※会場へは公共交通機関にてお越しください。

- ▶ 地下鉄名城線 ナゴヤドーム前矢田(1番出口)徒歩10分、砂田橋(1番出口)徒歩10分
- ▶ ゆとりーとライン ナゴヤドーム前矢田 徒歩7分、砂田橋 徒歩7分
- ▶ JR中央線・名鉄瀬戸線 大曾根 徒歩20分
- ▶ 市バス 大幸三丁目 バス停南側



2019年度大学院医学系研究科(保健学)市民公開講座 アンケート集計結果

①性別、②年齢構成

	男	女	その他	未記入	計	%
10代	7	5	0	0	12	18%
20代	0	2	0	0	2	3%
30代	2	0	0	0	2	3%
40代	4	2	0	0	6	9%
50代	6	5	0	0	11	16%
60代	5	5	0	0	10	15%
70代	5	7	0	1	13	19%
80代以上	6	4	0	0	10	15%
未記入	1	0	0	0	1	1%
計	36	30	0	1	67	100%

③職業

	男	女	その他	未記入	計	%
学生	9	6	0	0	15	22%
会社員	13	3	0	0	16	24%
自営業	0	0	0	0	0	0%
主婦/主夫	1	9	0	0	10	15%
無職	12	4	0	1	17	25%
その他	0	7	0	0	7	10%
未記入	1	1	0	0	2	3%
計	36	30	0	1	67	100%

④本学の卒業生か

	男	女	その他	未記入	計	%
はい	3	3	0	0	6	9%
いいえ	33	27	0	1	61	91%
未記入	0	0	0	0	0	0%
計	36	30	0	1	67	100%

⑤本講座を何で知りましたか(複数回答あり)

	男	女	その他	未記入	計	%
新聞、TV	0	1	0	1	2	3%
区役所	0	0	0	0	0	0%
生涯学習センター	2	2	0	0	4	6%
図書館	2	0	0	0	2	3%
友人情報	2	5	0	0	7	10%
本学科からの案内	9	13	0	0	22	31%
その他	21	12	0	0	33	46%
未記入	2	0	0	0	2	3%
計	38	33	0	1	72	100%

⑥感想を聞かせてください

	男	女	その他	未記入	計	%
役に立った	15	12	0	1	28	42%
まあ役に立った	15	15	0	0	30	45%
あまり参考にならなかった	0	1	0	0	1	1%
その他	3	0	0	0	3	4%
未記入	3	2	0	0	5	7%
計	36	30	0	1	67	100%

⑦実施方法について

A全体の時間について

	計	%
丁度よい	61	91%
長い	0	0%
短い	4	6%
未記入	2	3%
計	67	100%

Bテーマ毎の時間について

	計	%
丁度よい	59	88%
長い	1	1%
短い	4	6%
未記入	3	4%
計	67	100%

C講演形式について

	計	%
講演型式	38	57%
参加型セミナー	17	25%
その他	3	4%
未記入	9	13%
計	67	100%

D【今後希望するテーマ】

- 医学関係
- 戦国時代の医学・AIによる医学
- 心理学・発達障害とその対応・脳と心的要因が身体に与える影響とその対処
- ホルモンについて/大動脈解離について(内臓)
- ゲノム治療
- 電子顕微鏡の基礎研究についての講演/遺伝子治療の基礎研究とその臨床応用/IPS細胞などの再生医療の現状
- 加齢に伴う情動機能の変化に関するテーマ/加齢に伴う身体機能の変化とその対応等
- 認知症発症の原因

【感想】

- 義足のモデルさんが活躍してることを知ることができてよかったです
- 脳の研究の現状が知れることは理解出来て興味があるが、話をもう少しゆっくりだと理解・記憶することが出来るが、大学での講義のスピードのままなのか？
- 自分の性格、精神状態を併せて考えてみました
- 医工連携の話が聴けて参考になった
- 現在うつ症状の方の支援をしております。なかなか改善されず、多少メカニズムがわかったように思います。
- 刺激とヒントをもらいました
- 興味深く聞かせていただきました
- 男女を考えるとホルモンと閉経が及ぼす心理的变化とか、専門が画像と思いますがセロトニンなど生理活性物質などがどのように関与するかも紹介してもらえるとよかった
- 興味深く聞かせていただきました

2019 年度の市民公開講座はリハビリテーション療法学専攻作業療法学講座が担当しました。近年の脳機能イメージング手法やロボット技術の発展により、医学・介護領域での研究が飛躍的に進歩しつつある中、「脳とこころの研究とその社会的応用」をテーマに掲げ、2つの講演を行いました。

第1講は「ヒト脳研究の昔と今」を主題として、作業療法学講座の飯高哲也教授より脳機能研究における研究手法の概説を含め、脳機能研究の歴史的変遷と最近の知見を講演していただきました。

第2講は「医療・介護領域に導入されるロボット技術応用の新しい流れ」を主題に、作業療法学講座の千島亮教授より、ロボット技術の発達と今後の社会の中での応用について情報提供がなされました。

当日は10代から80代までの幅広い年代の市民の方に参加いただき、講演後も多くの質疑がなされました。公開講座後のアンケートでも9割以上の参加者から役に立つテーマであったとの評価を頂き、大学での研究成果や知的財産を地域住民の皆様に還元する、という本講座の主旨を満たすことができたと思われます。

(2019年度地域貢献委員会委員長：上村 純一)